

平成 27 年度

「地域連携教員の実態に関する調査研究」報告書

栃木県総合教育センター
北海道教育大学釧路校廣瀬隆人研究室

□はじめに

栃木県教育委員会では、「とちぎ教育振興ビジョン〔三期計画〕」の基本理念として、「とちぎの子どもたちを 自らの力で 自分の未来を 力強く切り拓いていける人間に育てます」と定めました。子どもたちが、未来に描いた夢や希望に向かって自己実現を図るとともに、他者とかかわりながら社会を形成していくためには、学校・家庭・地域がそれぞれの教育機能を生かして連携をしながら取り組んでいくことが求められます。

また、平成 26 年度から県内全公立学校に「地域連携教員」を設置^{【参考資料 1】}し、学校・家庭・地域の連携をより一層推進していくため、連携に関する校内組織体制の整備を図っています。これによって、地域の教育力を生かした教育活動を組織的・効果的・効率的に取り組むことが可能となり、これまで以上に子どもたちへの教育効果を高めたり、地域に根ざした特色ある学校づくりを推進したりできることが期待されています。

一方、国においても、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」において、これからの教育改革や地方創生の動向を踏まえながら、学校と地域の連携・協働を一層推進していくための仕組みや方策を提言しました。その中では、「学校と地域の『パートナーとしての連携・協働関係』への発展の必要性とともに、これからの学校と地域が目指すべき連携・協働の姿」として、「地域住民等と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子供たちを育むコミュニティ・スクールを推進すること」や「社会教育の体制として、地域住民や団体等のネットワーク化等により、学校との協働活動を推進する『地域学校協働本部』を整備すること」、そして「コミュニティ・スクールと『地域学校協働本部』が相互に補完し、高め合う存在として、両輪となって相乗効果を発揮していくための在り方」が述べられています。

このような動きからも、今後、学校内において「地域との連携を中心的な立場で進めていく教職員」は必要不可欠な存在であると考えられます。

そこで、本調査研究では、栃木県総合教育センターと北海道教育大学釧路校廣瀬隆人研究室の共同研究により、地域連携教員が学校・家庭・地域の連携を効果的・効率的に推進できる環境を整えるための手掛かりとなるよう、現時点での地域連携教員の職務内容や実際の活動の様子などの情報を収集することにしました。

調査結果から、地域連携教員は、9 割近くが自分の職務の重要性について肯定的にとらえており地域と連携した活動を推進していくことに前向きな姿勢であること、関係業務に取り組んだことで「教育活動の充実」に最も効果を感じていること、一方で関係業務に取り組むための「時間の確保」に一番の課題を感じていることなどが明らかになりました。また、「校内研修等に取り組んでいる」、「チーム体制で取り組んでいる」などの方が関係業務について高い効果を得ていることをうかがうことができました。

これらを踏まえ、本報告書では地域連携教員の活動推進を一層図ることができるようにするため、「地域連携教員の加配による専門性の確立」、「地域連携教員に関する研修の充実」などに関する提言を行っています。

今後、「学校と地域をつなぐ鍵」として期待される地域連携教員が、地域と連携した様々な取組を一層推進するために本報告書を役立てていただければ幸いです。

結びに、本調査研究の実施にあたり、宇都宮大学地域連携教育研究センター佐々木英和准教授、県生涯学習課、県内各教育事務所ふれあい学習課、ヒアリング調査協力校等、御協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 28 年 3 月

栃木県総合教育センター 所長 長野 誠
北海道教育大学釧路校 教授 廣瀬 隆人

□目次

第1章 調査研究の概要	1
1 調査研究の目的	
2 調査の方法・対象・内容・期間	
3 調査研究期間	
第2章 調査を行うにあたって	2
1 調査に至る経緯	
2 調査内容の検討	
第3章 アンケート調査から	3
1 基礎データの集計結果	3
2 調査項目の全体集計結果	4
3 調査項目の属性別集計結果	13
第4章 ヒアリング調査から	20
1 協力者	
2 調査のまとめ	
第5章 まとめと提言	27
【参考資料】	29
1 地域連携教員の設置に関する指針	29
2 地域連携教員活動状況調査 調査票	30
3 地域連携教員活動状況調査 問10 記述内容一覧	33

第1章 調査研究の概要

1 調査研究の目的

地域連携教員の実態把握と活動の様子的事例収集をすることで、地域連携教員が今後の活動促進を図るために参考となる情報を提供する。

2 調査の方法・対象・内容・期間

方法	対象	内容（主な項目）	実施期間
アンケート調査	・ 県内全地域連携教員 620名	・ 業務内容 ・ 取組状況 ・ 組織体制 ・ 活動の効果 ・ 活動の課題 など	平成27年11月 ～平成27年12月
	【内訳】 小学校 376名 中学校 161名 高等学校 68名 特別支援学校 15名		
ヒアリング調査	・ 県内地域連携教員 12名	・ 特色となる事例 ・ 日頃の取組 など	平成27年10月 ～平成27年12月

3 調査研究期間

平成27年5月～平成28年3月

第2章 調査を行うにあたって

1 調査に至る経緯

平成26年4月、本県内全公立学校に地域連携教員が設置されたが、県内一般はもとより学校現場においても「地域連携教員」という言葉の定着はまだ十分ではない。また、地域連携教員自身も、「どんな仕事をすればよいのか」「どこから手を付けてよいのか」など、迷いながら業務にあたっている教員も多いと思われる。

そこで、本調査研究では地域連携教員の実態を明らかにするとともに、地域連携教員が実際の場面でのどのような関わり方をしているのかを事例として紹介することで、今後の活動を推進していく上で参考となるような情報を収集したいと考えた。

2 調査内容の検討

(1) アンケート調査に向けて

県内全ての地域連携教員を対象に、県生涯学習課と合同で地域連携教員の実態調査^{【参考資料2】}を行うこととした。調査内容は、「業務内容」「取組状況」「組織体制」「活動の効果と課題」など、現在の活動状況を把握するためのものとした。

(2) ヒアリング調査に向けて

質問項目を大きく4つとし、それぞれの項目ごとにキーワードに関係する先進的・特徴的・意欲的な取組をしている地域連携教員に、「実際にどのような取組をしているのか」ということを聞き取りたいと考えた。

質問項目	キーワード
地域連携教員として心がけていること	○地域を知る・つなぐ ○尊重した・対等な関係づくり ○地道な日常的な活動
地域連携教員として着手したこと	○地域を知る ○計画の作成・整理・見直し ○全職員の共通理解
地域連携教員として身につけたい資質	○地域を知る ○関係を築くためのコーディネーション能力（調整力） ○コミュニケーション能力
地域連携教員としての活動事例	○コーディネーターや学校支援ボランティアの活動に関する情報や具体的な事例

※キーワードは「新任地域連携教員研修(H27.5.22・参加者222名)」における事後アンケートの記述内容を分類・整理したもの。

第3章 アンケート調査から（質問内容の詳細は【参考資料2】参照）

1 基礎データの集計結果

(1) 調査対象

【表 調査対象者数と回収率】

校種	地域連携教員数(母集団)	回答者数(標本数)	回収率
小学校	376	342	91.0%
中学校	161	142	88.2%
高等学校	68	66	97.1%
特別支援学校	15	14	93.3%
全体	620	564	91.0%
	N=620	(人)	

(2) 小中学校の規模

【表 小中学校の規模別校数 ※学校規模は児童生徒数をもとに独自に分類した】

校種	小規模校(～100名)	中規模校(101～400名)	大規模校(401名～)
小学校 (n=342)	96 28.1%	159 46.5%	87 25.4%
中学校 (n=142)	20 14.1%	72 50.7%	50 35.2%
合計 (n=484)	116 24.0%	231 47.7%	137 28.3%
			(校)

(3) 地域連携教員の年代

【表 地域連携教員の年代別人数】

校種	～30代	40代	50代～	無回答
小学校 (n=342)	11 3.2%	81 23.7%	249 72.8%	1 0.3%
中学校 (n=142)	13 9.2%	34 23.9%	95 66.9%	0 0.0%
高等学校 (n=66)	8 12.1%	29 43.9%	29 43.9%	0 0.0%
特別支援学校 (n=14)	2 14.3%	9 64.3%	3 21.4%	0 0.0%
全体 (n=564)	34 6.0%	153 27.1%	376 66.7%	1 0.2%
				(人)

(4) 地域連携教員の職名

【表 地域連携教員の職名別人数】

校種	教頭(副校長)	主幹教諭・教務主任	教諭(担任)	教諭(担任外) その他(講師等)
小学校 (n=342)	123 36.0%	98 28.7%	100 29.2%	21 6.1%
中学校 (n=142)	38 26.8%	12 8.5%	46 32.4%	46 32.4%
高等学校 (n=66)	2 3.0%	6 9.1%	28 42.4%	30 45.5%
特別支援学校 (n=14)	0 0.0%	1 7.1%	9 64.3%	4 28.6%
全体 (n=564)	163 28.9%	117 20.7%	183 32.4%	101 17.9%
				(人)

(5) 社会教育主事資格の有無

【表 社会教育主事資格の有無別人数】

校 種	資格あり	資格なし	無回答
小学校 (n=342)	153 44.7%	188 55.0%	1 0.3%
中学校 (n=142)	76 53.5%	65 45.8%	1 0.7%
高等学校 (n=66)	37 56.1%	29 43.9%	0 0.0%
特別支援学校 (n=14)	9 64.3%	5 35.7%	0 0.0%
全 体 (n=564)	275 48.8%	287 50.9%	2 0.4%

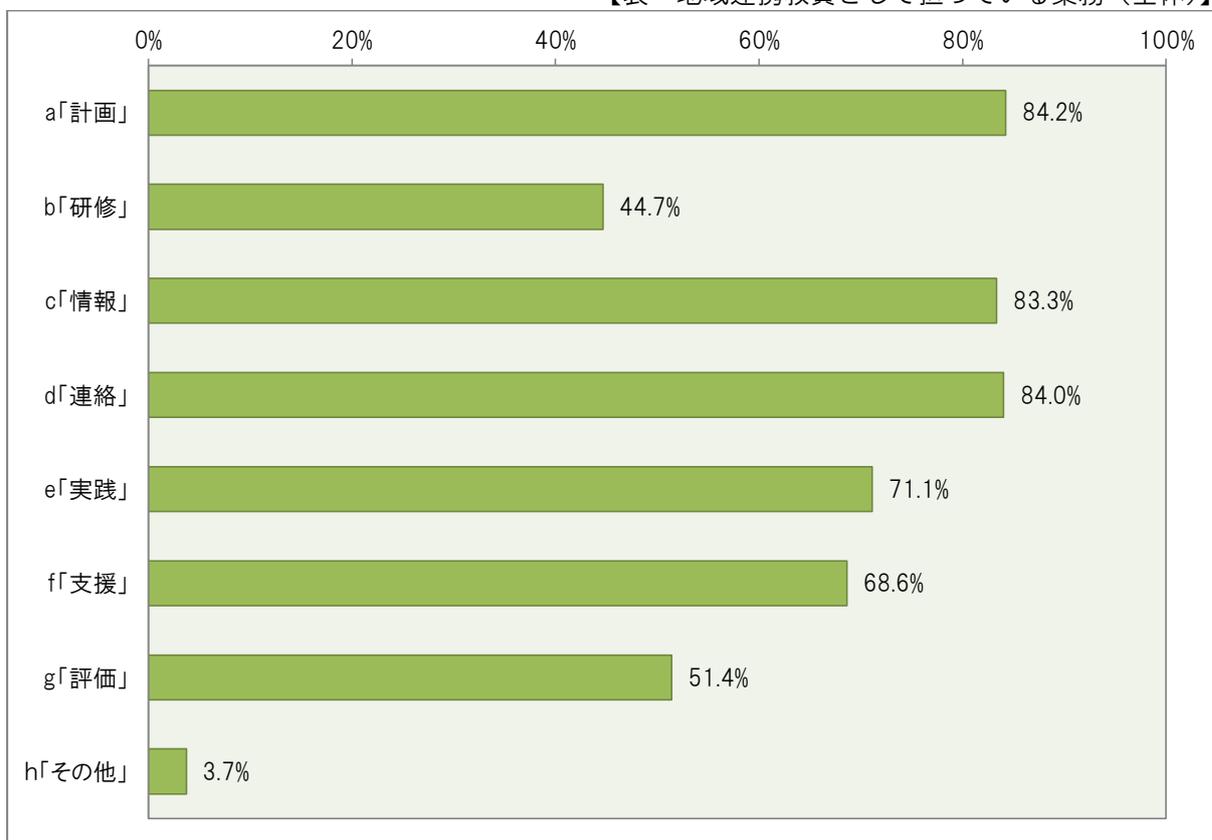
(人)

2 調査項目の全体集計結果

(1) 問 1.地域連携教員として担っている業務（複数回答）

「計画」、「情報」、「連絡」の割合が高く、「研修」、「評価」の割合が低い。

【表 地域連携教員として担っている業務（全体）】



(n=564)

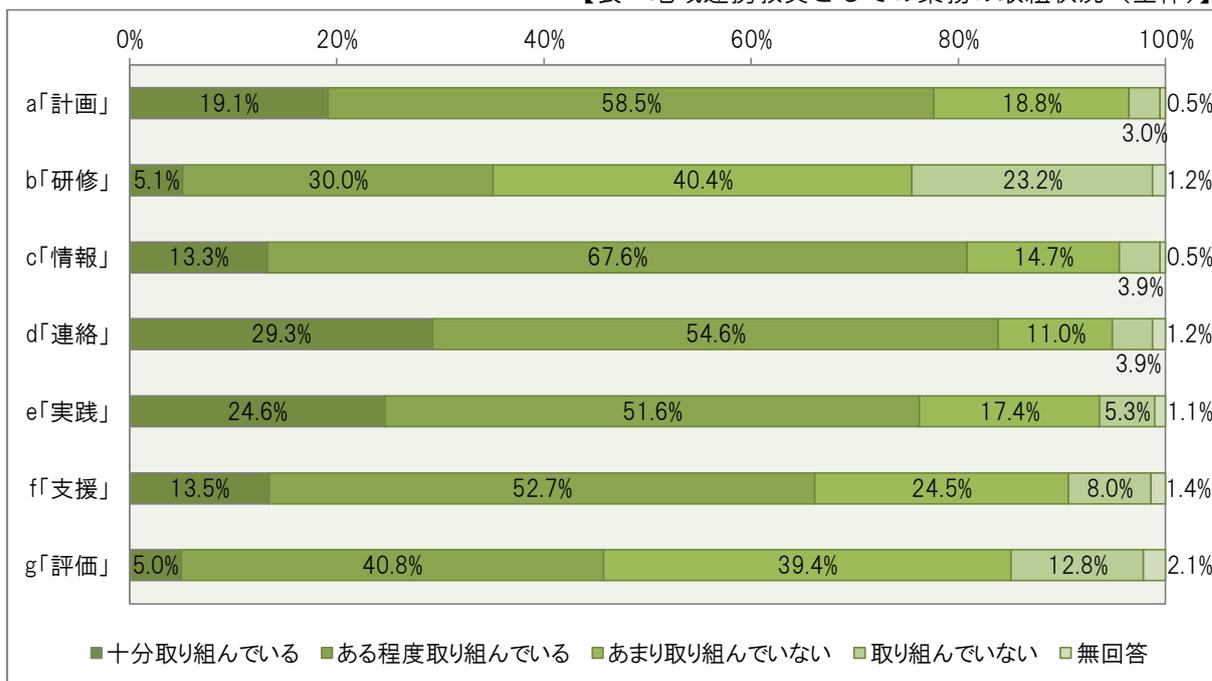
■ その他の記述内容

- 校内の地域連携関係活動の分類・整理
(全体像の把握)
- 人材活用に関する実施記録作成
- 連携先の連絡先を一括してデータ化
- 学校支援ボランティアの募集
- 関係地域団体事業の計画・運営
- PTA 活動の運営及び協力
- 関係地域会議への出席
- 地域行事への参加
- 地域連携教員担当文書の処理
- ボランティア関係の必要物購入

(2) 問 2.地域連携教員としての業務の取組状況

「計画」、「情報」、「連絡」、「実践」については、他項目と比較してよく取り組まれており、特に「十分取り組んでいる」を見ると、「連絡」の割合が29.3%と最も高い。一方、「研修」、「評価」については、他項目と比較してあまり取り組まれておらず、特に「取り組んでいない」を見ると、「研修」の割合が23.2%と最も高い。

【表 地域連携教員としての業務の取組状況 (全体)】

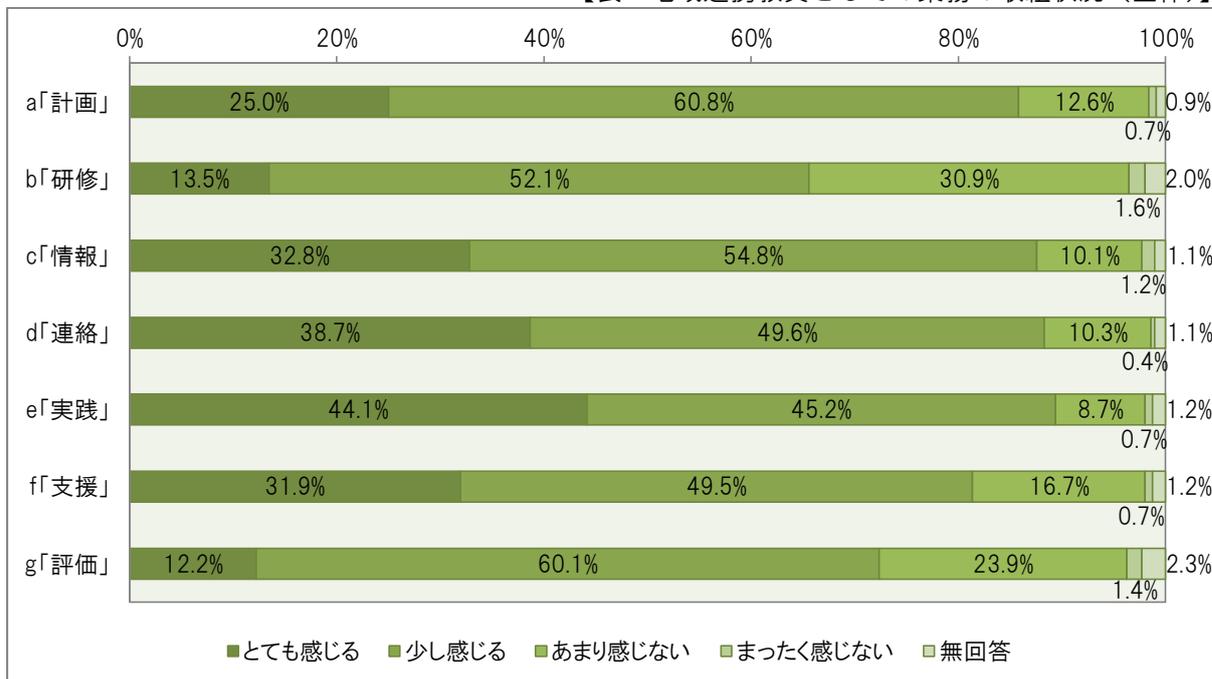


(n=564)

(3) 問 3.地域連携教員としての業務の「やりがい」や「意欲」

「計画」、「情報」、「連絡」、「実践」については、他項目と比較してやりがいや意欲を高く感じており、特に「とても感じる」を見ると、「実践」の割合が44.1%と最も高い。一方、「研修」、「評価」については、他項目と比較してやりがいや意欲をあまり感じておらず、特に「あまり感じない」を見ると、「研修」の割合が30.9%と最も高い。

【表 地域連携教員としての業務の取組状況 (全体)】



(n=564)

(4) 問 4.地域連携に関する取組をチーム体制で進めているか

約 7 割の学校が、地域連携に関する取組を役割分担をしながらチーム体制で進めている。

【表 地域連携に関する取組をチーム体制で進めているか (全体)】



(n=564)

■役割分担に関する記述内容

- 業務内容を整理し、それぞれの業務について誰が役割を担っているかを下表にまとめた。
- 分担されているものに○、中でも多く記述のあるものに◎を付けた。
- 複数の担当者に印が付いている業務は、それらの担当者間で協力していたり、いずれかの担当者が単独で担っていたり、各校の実情によりさまざまである。
- 傾向としては、「学校全体に関わることは教頭や教務」「具体的な企画・運営・記録は直接関係する者」「最初の窓口としての連絡調整・後方支援・記録の集約は地域連携教員」となっている。これといった線引きはせず、各業務について緩やかに担当者を重ねつつ、状況に応じて分担している。

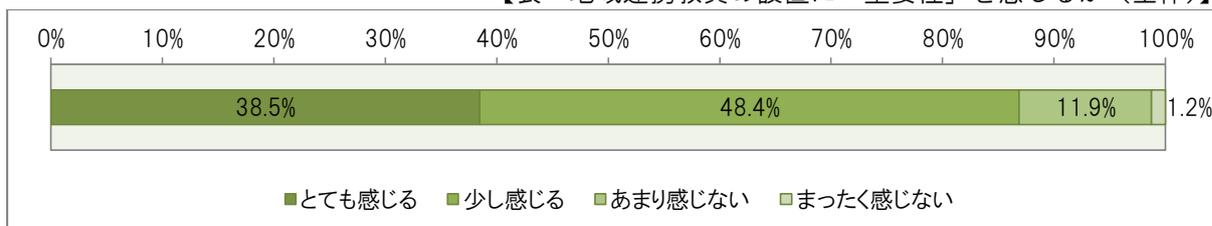
【表 地域連携に関する業務内容分担】

業務内容	担当者							
	地域連携担当	校長	教頭 (副校長)	主幹教諭 教務主任	関係学年 関係分掌	コーディネーター	地域団体	
<input type="checkbox"/> 地域の関係会議への出席	○	◎	○					
<input type="checkbox"/> 地域行事への参加協力	○	◎	○					
<input type="checkbox"/> 情報の収集	○	○	○					
<input type="checkbox"/> 関係研修の受講	○	○	○					
<input type="checkbox"/> 情報の発信	○	○			◎			
<input type="checkbox"/> コーディネーターとの連絡調整全般	○		○	○				
<input type="checkbox"/> ボランティアとの連絡調整全般	○		○	○		◎		
<input type="checkbox"/> 関係事業の企画・運営	○		○	○	○		○	
<input type="checkbox"/> 全体計画の作成	◎			○				
<input type="checkbox"/> 年間計画の作成	◎			○				
<input type="checkbox"/> 関係文書の收受や発送	○				○			
<input type="checkbox"/> 関係予算計画	○				○			
<input type="checkbox"/> ボランティアの募集	○					○		
<input type="checkbox"/> 連携先と校内関係者のコーディネート	◎					○		
<input type="checkbox"/> 活動記録の蓄積	◎							
<input type="checkbox"/> 校内ニーズの把握	◎							
<input type="checkbox"/> 職員への周知	○							
<input type="checkbox"/> 情報の提供	○							
<input type="checkbox"/> 連携事業の支援	○							
<input type="checkbox"/> 助言や指導		○	○					
<input type="checkbox"/> 関係者の接待対応		○	○					
<input type="checkbox"/> PTAとの連絡調整			○	○				
<input type="checkbox"/> 地域の団体との連絡調整			○	○		○		
<input type="checkbox"/> 外部講師との連絡調整			○					
<input type="checkbox"/> 学校の窓口として対外的な連絡調整			○					
<input type="checkbox"/> 行政との連絡調整			○					
<input type="checkbox"/> 他校との連絡調整			○					
<input type="checkbox"/> コーディネーターとの具体的な交渉					◎			
<input type="checkbox"/> ボランティアとの具体的な交渉					◎			
<input type="checkbox"/> 関係事業の記録					◎			
<input type="checkbox"/> 関係事業の活動報告					◎			
<input type="checkbox"/> 事業企画への協力						○		

(5) 問 5.地域連携教員の設置に「重要性」を感じるか

「とても感じる」と「少し感じる」を合わせると 86.9%となり、約 9 割の地域連携教員が重要性を感じている。

【表 地域連携教員の設置に「重要性」を感じるか (全体)】

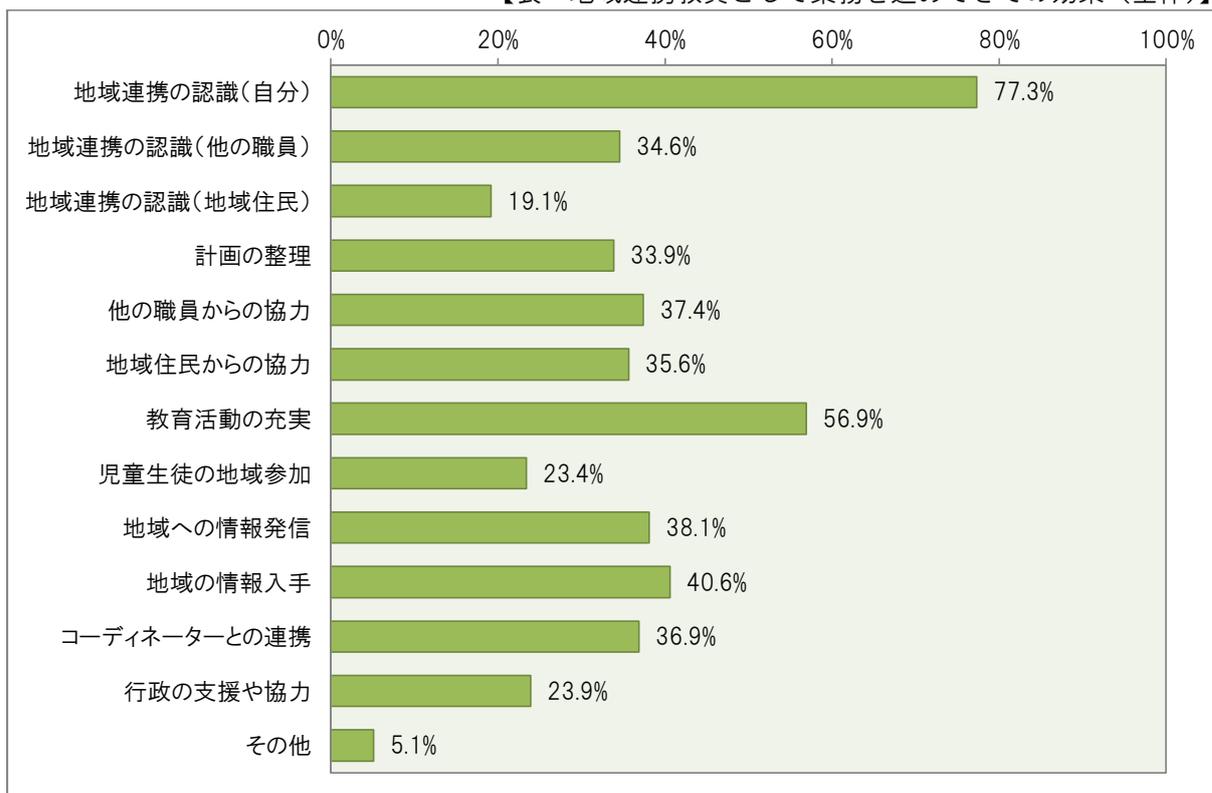


(n=564)

(6) 問 6.地域連携教員として業務を進めてきての効果 (複数回答)

「地域連携の認識 (自分)」の割合が最も高く、次いで「教育活動の充実」の割合が高い。

【表 地域連携教員として業務を進めてきての効果 (全体)】



(n=564)

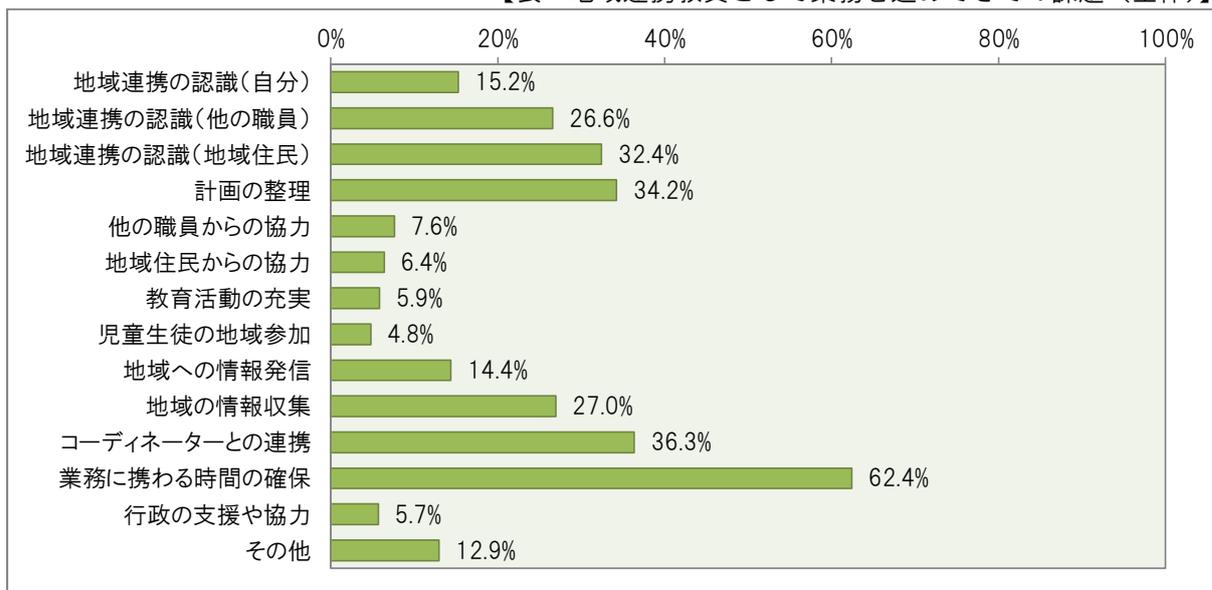
■ その他の記述内容

- 学校内でどのような地域連携をしているのかが職員間で共有できるようになった。
- ボランティアの活用によって、授業支援を充実させることができた。
- ボランティアによる教育活動支援により、生徒の技能が著しく向上した。
- 地域連携教員を通じた学校支援ボランティアへの要請により、担任の負担が軽減した。
- 学校も地域も相互に理解を深めることができ、子どもを一緒に育てていこうという意識がもてた。
- 多くの地域住民と教職員とがふれあうことで地域と学校の関係が深まった。
- 地域や保護者と関わることに積極的になり、職員間で地域や保護者との会合などの話題を持つことも増えた。
- ボランティアの教育活動参加により、地域自体が活性化してきた。
- 保護者の協力が得られないときでも、地域の協力を得ることができた。
- 気軽に手軽に学校支援ボランティアを授業に取り入れようとする流れができた。
- 学校支援ボランティア登録者が増加した。
- 行政側の担当者と話す機会を得られた。

(7) 問 7.地域連携教員として業務を進めてきての課題（複数回答）

「業務に携わる時間の確保」の割合がもっとも高い。

【表 地域連携教員として業務を進めてきての課題（全体）】



(n=564)

■その他の記述内容

- 多くの地域連携を行っているが、関係する学年や係が直接連携を行っているので、地域連携教員が全体像を把握しているとは限らない。
- 地域連携に関連した活動は多種多様であり、すべてに関わることは難しい。
- 周囲の地域連携教員に対する認識が不十分であるため、情報が集約されない。
- 既存の活動に加えて新たな活動を増やすことに抵抗があり、活動の精選が必要である。
- 今まで学年や係が直接連携していたものに地域連携教員やコーディネーターが間に入るようになり、手間や時間がかかるようになったり連絡に食い違いをきたしたりしている。
- 学校によって役割に大きな差があり、異動による戸惑いが大きい。
- 職員には異動があるので、引き継ぎの仕方を工夫する必要がある。
- 学級担任と地域連携教員の役割分担が曖昧になっている。
- 地域連携教員としての業務と校務分掌での業務の線引きが分からない。
- 学級担任が地域連携教員を務めることは時間的な制約がありすぎる。
- 専門的な知識をもつ社会教育主事有資格者がいない。地域連携教員が求められる業務を十分に果たすためには、社会教育主事有資格者の配置と、業務を行うための時間を規則として明確にし、人的な配置をすることが必要である。
- 地域連携教員が率先して何か新しいことを行わなければならないとしたら、管理職か主幹教諭や教務主任が地域連携教員にならないと実際には何も出来ない。
- 教員によって地域連携への理解や実践に違いが見られるため、学年間の差が生じている。
- 地域の活動に生徒を参加させる時間を生み出すことが難しい。
- コーディネーターをどのように選び、その後どのように頼んでいくのか、わからない。
- コーディネーターやボランティアの高齢化が進み、今後、体制維持が困難になると思われる。
- 近隣自治会や地域内組織の代表とのつながりは広がっているものの、それを組織している住民とのつながりに広がっていない。
- 地域のつながりが複雑で、地域をまとめる組織を作りにくい。
- 学校主体ではなく、地域を主体とした活動にしていくための手法。
- 地域と学校が相互に利点を感じる計画を作成することが難しい。
- 各校の地域連携教員間での情報共有ができない。
- 行政からの支援の体制がなく学校任せである。市としてどのように取り組んでいくのか指針も示されていない。
- 行政の研修が多いため、教職員や地域の方の負担が多い。内容、回数ともに精選してほしい。
- 高等学校や県立中学校では、地域の定義や連携の仕方に課題がある。
- 特別支援学校は、在籍児童生徒の実態や学校の特性から地域との関わり方が難しい。

(8) 問 8.地域連携教員としての活動をさらに充実させるために必要だと思うこと

記述内容を整理し、似た内容のものは集約した。

■仕事に取り組むスタンス

- 今行っている取組を充実させていくことが大切。
- これまで地域の力を借りて行ってきた活動を地域連携活動として位置付ける。
- 現在の取組をさらに一歩進める努力をしていく。
- 慌ててあれもこれも行うのではなく、一步一步着実に前進していく。
- 数多くの活動をするに努めるのではなく、本当に必要な活動を残して、あとは思い切って精選する。
- 創意工夫によるところが大きい。新規のものは少々強引でもやってみる勇気も必要。
- 地域と連携するよさを実感することができるようにするには、何を必要としているのか、いづろ必要としているのかといった「切実な必要感」を地域連携教員が察知することが大切。
- 自分から積極的に地域に出て行き、地域との連携を密にする。
- 地域の方々への協力を積極的に学校から求めていく。
- 学校への関わりをとおして地域住民や保護者同士のつながりができるような仕掛け。
- 地域の中の学校、地域の中の子ども達という考え方。
- 計画立案から評価までに十分に関わる。
- PDCA サイクルを常に意識しながら。
- 「継続は力なり」を信じて行う。

■児童生徒

- 地域をよく知らなかったり、地域の中で遊ばなかったりする児童生徒が多く、地域のよさを知る活動が必要。
- 地域の活動に児童生徒を積極的に参加させる手立てを考える。
- 地域活動に参加する児童生徒を増やしていく。
- 児童生徒がボランティアとして参加できるような地域の取組がなされると、より地域の活動に関心をもち、積極的にかかわっていきける。

■情報収集と現状把握

- 「職員のニーズ」「子どもたちのニーズ」「地域住民のニーズ」をきちんと把握する。
- 地域の情報
 - ・ 地域の教育資源（人やボランティアと場所）
 - ・ 地域住民が、学校との連携で何を望んでいるのか
 - ・ 子どもたちに出会ってほしい人
 - ・ 学校や子どもたちのために力を貸したいと思っている人
- 地域の関係機関の連絡先・連絡方法の一覧作成。
- 協力していただいた方の現状・要望・活動時の様子などの把握。
- 現在行われている活動内容をまとめる。
- 個々の活動について、地域連携教員と今までの担当者の関わり方を整理していく。
- 地域連携に関係のある活動を整理・把握して、地域連携教員が関わる必要性があるものを見つけ出す。
- 継続事業に関しては、実施時期をまとめておく。
- 各学年で実践してきたものを今後も継続していくためには、だれでも実践できるように資料を蓄積してまとめる。

■校内計画の整備

- 学校全体の地域連携に対する目標を設定する。
- 年間計画の作成や精選。実践に沿った全体計画・年間計画等の整備が必要である。年間を通して実際に使える、具体的な計画を作成する。
- 新規の取組を行うばかりでなく、その効果を分析・評価し、精選する。

- 学期に1回程度、計画の見直しを行う時間を確保する。
- 学校の教育活動に「地域との連携をどの活動でどのように取り入れれば有効であるか」「地域にどのように関わっていけばよいのか」を教員全体でじっくりと話し合い、計画を整備する。
- 教育課程との関連に十分配慮する。各教科の年間指導計画への位置付けをもっと整理する。
- ボランティア等の支援計画一覧表等を整備する。
- 地域連携に関する諸計画を整理し、それを地域と学校が共有し、計画的に地域連携を進める。

■校内の組織体制

- 地域連携のための組織体制の明確化。
- 地域連携教員が、ゆとりをもって業務できるよう、学校の体制を整える。
- 地域連携にはチームとして取り組んでいく体制づくり。
- 円滑な係運営を行うため、地域連携担当間での役割分担の精査。
- 地域連携チームとその他の教員とが組織的に協力できるようにする。
- 地域連携教員は誰がなってもいいように校内の協力体制を整えていく。
- システムを簡素化し、分かりやすい、機能しやすいシステムを構築する。
- 学校全体の業務を精選する。
- 計画、実践、評価を累積しながら、運営しやすい体制を作っていく。

■校内での情報共有（職員の理解・意識）

- 学校全体で、地域と連携した行事のねらいの明確化と共有。
- 他の職員が地域連携の重要性・必要性について理解するための研修会を行い、意識改革を図る。
- 他の教員が地域連携教員と同じように関わりをもとうとすると、お互いに意識を高め学習効果を上げることができる。
- 他の教員も、地域連携教員がどのような職務を担っているのかを把握する。
- 地域連携教員がすべてを執り行うのではなく、教員一人一人みんなが地域と連携することを念頭に置いて臨む。

■地域への情報発信

- 常に保護者、一般の地域住民、連携関係者の三者を意識した情報発信。
- 地域連携教員の存在や役割、地域連携の重要性・必要性、地域連携に関する活動、協力依頼・人材募集など、こまめな情報発信。
- 地域連携だより、ホームページ、学校だより、学年だより等あらゆる機会を利用した情報発信。

■地域との交流

- 多くの人と関わりながら地域の諸行事や活動に積極的に参加したり情報を得よう努力したりする。
 - ・ 育成会や自治会
 - ・ 公民館やコミュニティセンター
 - ・ ボランティア団体
 - ・ 社会福祉協議会
- 地域の諸団体の会合等に出席するなどして関わりを持つこと。まずは地域にどのような組織・どのような人がいるのか「知る」こと、次に「つながる」ことが第一歩だと思う。
- 地域の方からの協力を得られるようにするために、地域の方と交流する機会や場を増やす。
- 地域の方が学校に来校する機会を増やし、学校を理解してもらえる取組を粘り強く続ける。
- 地域の方が、学校に足を運びやすいような環境を整える。
- 地道な取組を継続することで相互理解を進める。
- 地域連携教員として、地域の方と積極的に情報交換をする。
- 地域連携教員を中心に、職員がより積極的に地域に関わる。

■地域との連携の在り方

- 学校からの要望を伝え、ボランティアを募集するだけでなく、地域のニーズを吸い上げる仕組みを作り、地域に貢献する活動を計画していく。
- 学校側だけでなく地域側にとってもメリットが感じられる活動に高めていく。

- 学校が主体で動くばかりではなく、地域側の考えや要望なども地域の代表者（またはコーディネーター）から聞き取り、両者で意見をすり合わせながら地域連携の在り方を検討していく。
- 学校において地域連携の打合せ会をもち、地域連携の理解と結束を強化したい。
- より効果的な地域連携を推進するためには、十分な事前打合せにより指導・支援方法等についてしっかりと共通理解した上で指導に当たる。
- 地域に対して、学校の実情（実は廃止したい活動もあること）を理解してもらう。
- 地域連携の必要性を保護者や地域の方に伝える研修会をもてるようにする。
- 学校と地域が自由に意見交換や情報共有をする場が必要である。
- 必要に応じて、行政も話合いの場に参加してもらう。
- 行政も含めた地域連携体制の確立。
- 地域から学校に出向き、直接アピールする機会があるとよい。
- 地域と学校が協力しながら「学校をみんなで支えて、子どもを健やかに育てていこう。」という意識を高めていく。
- 企業と連携する際には、学校の教育活動として可能な範囲を見極めることも重要である。

■ コーディネーター

- コーディネーターの発掘、養成、育成。
- 各校または中学校区にコーディネーターを配置する。
- コーディネーターが高齢化しているので世代交代を考える。
- 常時活動できるコーディネーター。
- 地域を知り学校とつなげてくれるコーディネーター。
- コーディネーターが学習支援ボランティア・学校環境整備ボランティア募集の情報を発信。
- 取組内容の相談対応、必要に応じて企画提案、さらに連絡調整もするようなコーディネーター（専門スタッフ）を各ブロックに配置する。
- コーディネーターと相互に補完し合いながら活動をさらに充実させる。
- コーディネーターと連携して、ボランティア登録者をさらに増やし、より充実した地域人材バンクの構築することが、教育の質や児童の学習や環境を充実させる。
- コーディネーターと計画を互いに理解し合うための話合いの機会と時間。
- 全職員とコーディネーターとのコミュニケーションを図る。

■ ボランティア

- ボランティアの受入内容を広げて人材も開拓する。
- ボランティア活動を保護者限定から一般地域住民に広げていく。
- PTA と連携し、保護者及び地域の方のボランティアによる学習支援の推進を図る。
- 各ボランティア間の連携ができる体制づくり。

■ 地域連携教員の設置にあたり

- 専任配置とそれに伴う職員の加配。
- 他の校務分掌の軽減。
- 休日勤務や時間外勤務時の勤務態様の在り方、身分的保証や、十分な対価。
- 社会教育主事有資格者の各校配置を推進する。
- 地域連携教員を学校に2人以上置く。
- 社会教育主事有資格者を地域連携教員に。
- 担任以外を地域連携教員に。
- 教務・主幹・教頭といった全体を見渡せる人が地域連携教員に。
- 学校と地域の両方の事情がわかっている人が地域連携教員に。
- 社会教育主事の資格がある者というよりは、ある程度現任校勤務経験が長く、地域の特性を理解した人が地域連携教員に。
- 地域連携教員はその地域と結びつきの強い人がならないとうまく連携できない。
- 勤務校の地域に在住している人。
- 地域連携教員に。社会教育主事の資格を積極的に取らせる。
- 退職教員の活用。

■地域連携教員の研修

- 地域連携教員の職務を十分に理解する。
- 研修で各学校の地域連携教員と情報交換を行う。学校には一人しかいないので心強い。
- 研修で地域連携教員の具体的な活動を知り、それを参考にしながら学校の実情に合わせて活動をしていく。
- 「地域とのつながりをもつことは重要だと感じていながらも一歩を踏み出せない教員」を支援または後押しする研修。
- 効率的、効果的な地域連携の在り方の研究。
- 理念だけでなく具体的に実践していく。
- 勤務校での実践例を増やし、視野を広めたり理解度を深めたりしていく。

■行政支援

- モデルとなるようなものを県などで示す。
- 市町がビジョンをもって、各学校に下ろしてもらえるとありがたい。
- 市町あるいは地区ではどのように取り組んでいくべきか示していく。
- 教職員の基本研修（初任・5年・10年・2年）等における地域連携に関する研修機会や内容の拡充。
- 教員数を増やす。
- コーディネーターの養成、設置を行政主導で行う。
- 市町が、その地域に合ったコーディネーターを育成するための研修を行う。
- コーディネーターの選出については、地域の公民館職員等の関わりが必要。
- 地域に学校支援地域本部を設置する機運を高めるような啓発を、市町が行う。
- 行政が地域住民への説明会等を行う。
- 行政から地域に対する情報発信。
- 行政に地域連携のためのポストを設置して、活動をサポートする。
- 生涯学習課に総括的なコーディネーターを設置する。
- 公民館などが窓口となって、コーディネーター的役割を担ってくれるとよい。
- 定期異動における社会教育主事有資格者の全学校配置や学校間の人数バランスへの配慮。
- 予算措置。活動にあたっての資金面の援助。

■連携に関する情報

- 先進校の事例をもっと知る必要がある。具体的にどのような事例がうまくいったか、うまくいくようになったきっかけはどのようなことかなど。
- 他の学校の取組の情報交換を行う機会。
- 校種をこえた地域内での地域連携教員の情報交換の機会。
- 広く県内外の優れた指導者の情報を得ることができるとよい。
- 学校に出向いてくれる企業等の情報や実際の授業の内容。
- 学校と連携できる関係諸機関の情報。

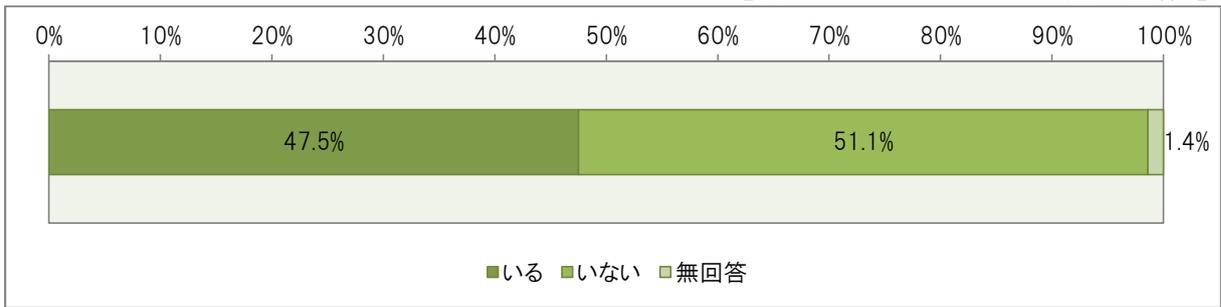
■その他

- 子どもの貧困対策を念頭に置いた学力向上施策を地域で推進する。
- 学校単位でなく、中学校区で取り組む。
- 地域連携教員が提案し、それをトップダウンで行うというやり方を確立する。

(9) 問 9-1.コーディネーターの有無

約半数の学校に、地域との連携を行う際の窓口としてのコーディネーターがいる。

【表 コーディネーターの有無 (全体)】

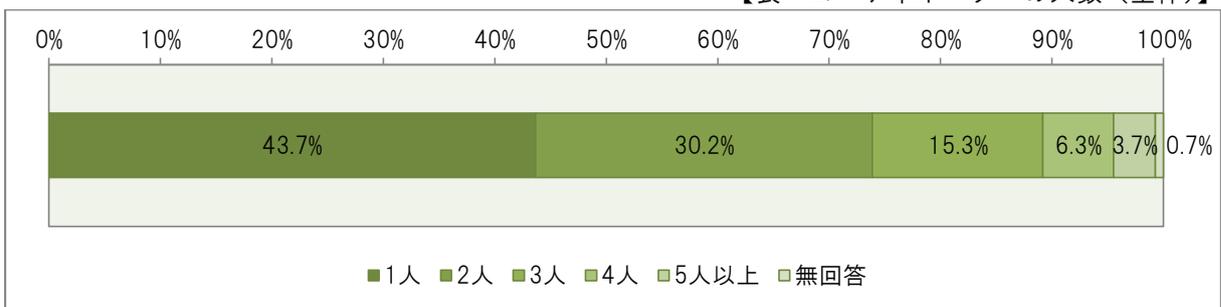


(n=564)

(10) 問 9-2.コーディネーターの人数

コーディネーターの人数は、「1人」が最も多く、4割以上を占める。

【表 コーディネーターの人数 (全体)】



(n=564)

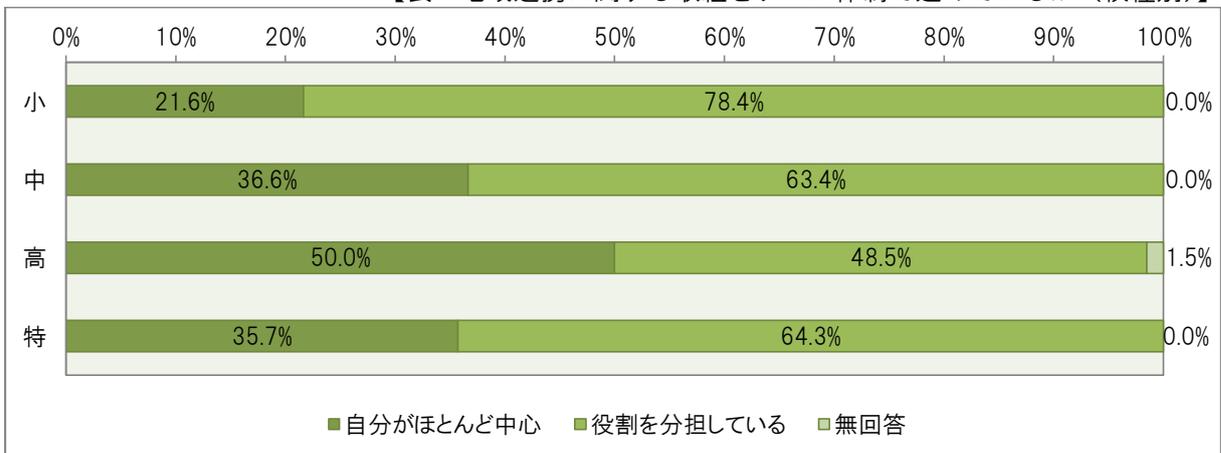
3 調査項目の属性別集計結果

ここからは、特徴的な差が現れた集計結果のみを記載した。

(1) 校種別 問 4.地域連携に関する取組をチーム体制で進めているか

「自分がほとんど中心」の割合は、「高等学校」が最も高く、次いで「中学校」、「小学校」の順に高くなっている。(「特別支援学校」は、サンプル数が少ないため比較対象にしていない。)

【表 地域連携に関する取組をチーム体制で進めているか (校種別)】

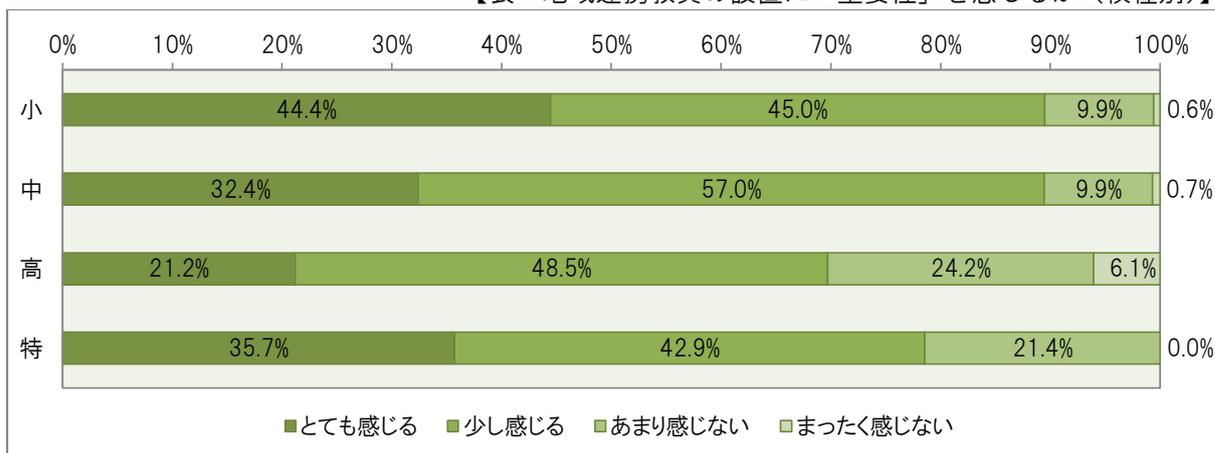


(小学校 n=342 中学校 n=142 高等学校 n=66 特別支援学校 n=14)

(2) 校種別 問 5.地域連携教員の設置に「重要性」を感じるか

重要性を感じている割合は、「小学校」が最も高く、次いで「中学校」、「高等学校」の順に高くなっている。（「特別支援学校」は、サンプル数が少ないため比較対象にしていない。）

【表 地域連携教員の設置に「重要性」を感じるか（校種別）】

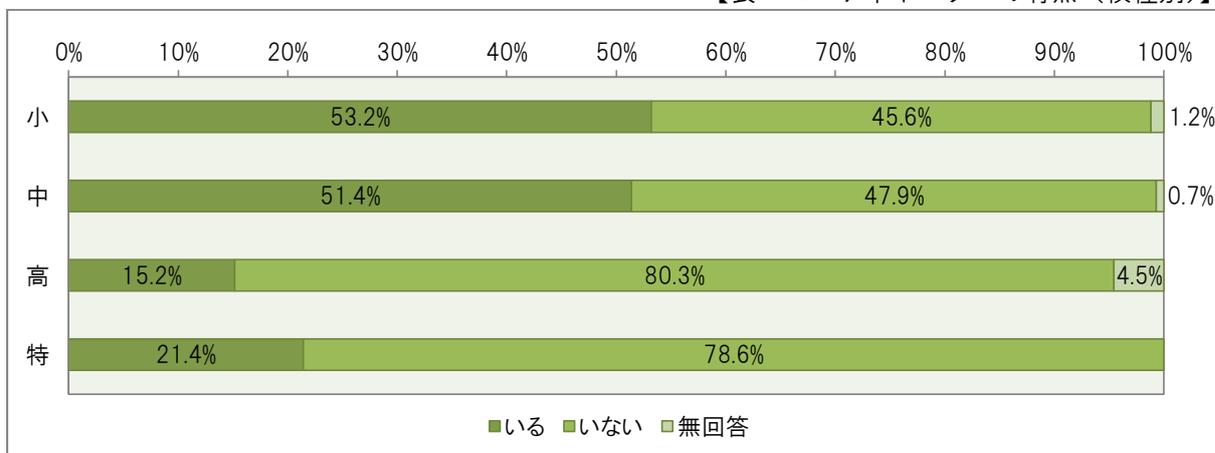


(小学校 n=342 中学校 n=142 高等学校 n=66 特別支援学校 n=14)

(3) 校種別 問 9-1.コーディネーターの有無

「小学校」、「中学校」では、半数程度の学校にコーディネーターが設置されている。

【表 コーディネーターの有無（校種別）】

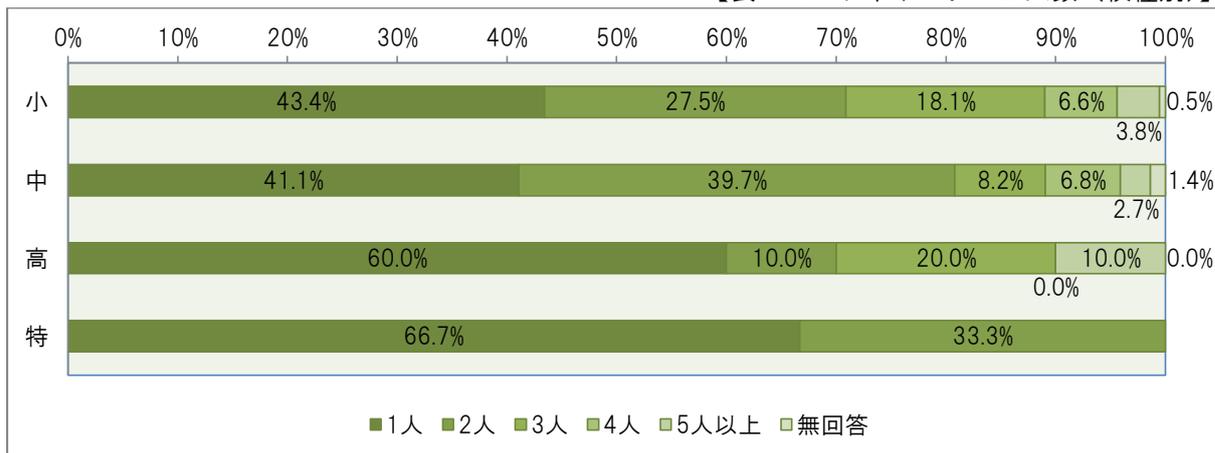


(小学校 n=342 中学校 n=142 高等学校 n=66 特別支援学校 n=14)

(4) 校種別 問 9-2.コーディネーターの人数

コーディネーターの人数は1人と回答している割合が各校種とも多い。（「特別支援学校」は、「3人」、「4人」、「5人以上」、「無回答」が0.0%のため、省略してある。）

【表 コーディネーターの人数（校種別）】

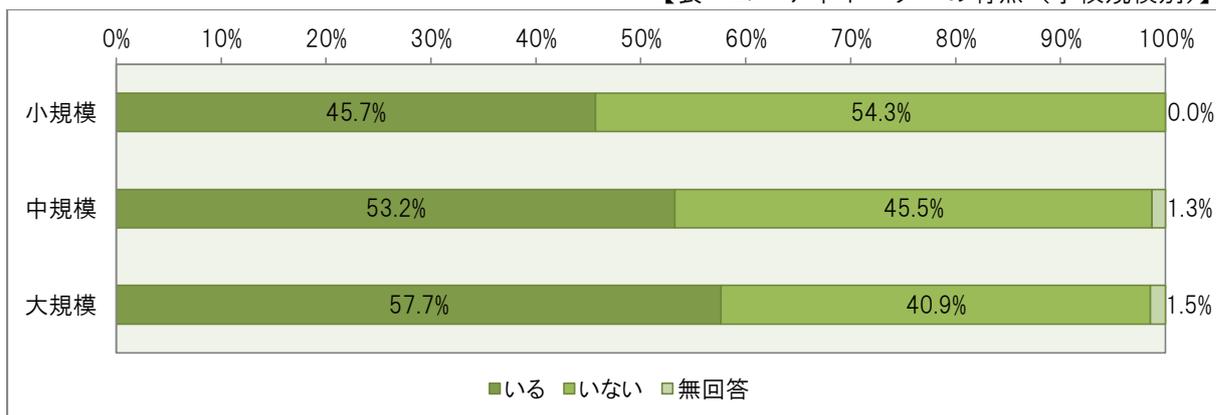


(小学校 n=342 中学校 n=142 高等学校 n=66 特別支援学校 n=14)

(5) 学校規模別 問 9-1.コーディネーターの有無

コーディネーターを配置している割合は、「大規模校」の割合が最も高く、次いで「中規模校」、「小規模校」の順に高くなっている。

【表 コーディネーターの有無（学校規模別）】



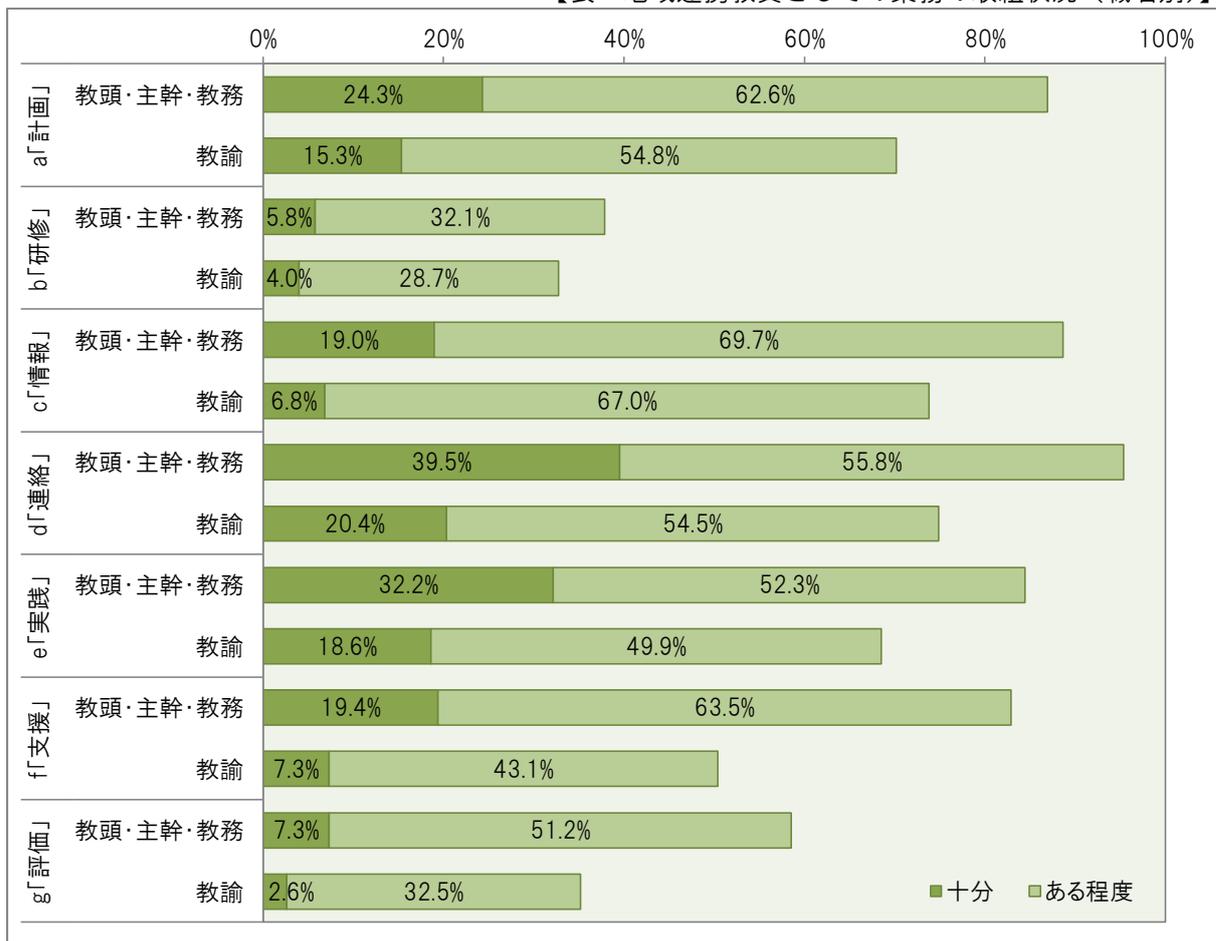
(小規模校 n=116 中規模校 n=231 大規模校 n=137)

(6) 職名別 問 2.地域連携教員としての業務の取組状況

ここでは、「教頭(副校長)」、「主幹教諭」、「教務主任」を合わせたものを「教頭・主幹・教務」とし、「教諭(担任)」、「教諭(担任外)」、「その他(講師等)」を合わせたものを「教諭」として集計した。また、それぞれの項目ごとに「十分取り組んでいる」、「ある程度取り組んでいる」と回答した割合のみをグラフに表している。

「教頭・主幹・教務」の方が、全体的に業務に取り組んでいる割合が高く、円滑に業務を進められることがうかがえる。

【表 地域連携教員としての業務の取組状況（職名別）】



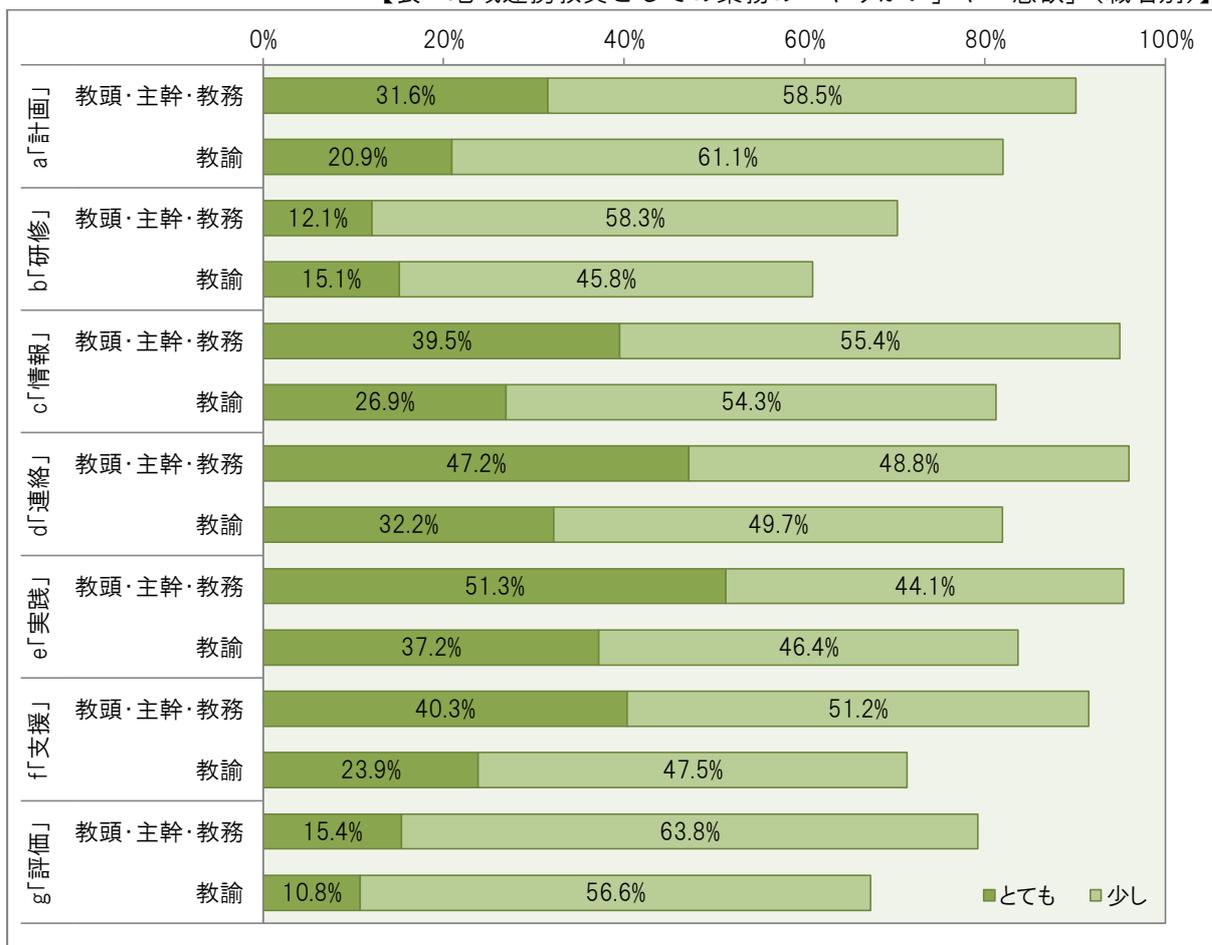
(教頭・主幹・教務 n=280 教諭 n=284)

(7) 職名別 問3.地域連携教員としての業務の「やりがい」や「意欲」

ここでは、分類の仕方は(6)と同様に行い、それぞれの項目ごとに「とても感じる」、「少し感じる」と回答した割合のみをグラフに表している。

「教頭・主幹・教務」の方が、全体的にやりがいや意欲を感じている割合が高い。「研修」においては、「教諭」の方が「とても感じる」の割合が高い。

【表 地域連携教員としての業務の「やりがい」や「意欲」(職名別)】



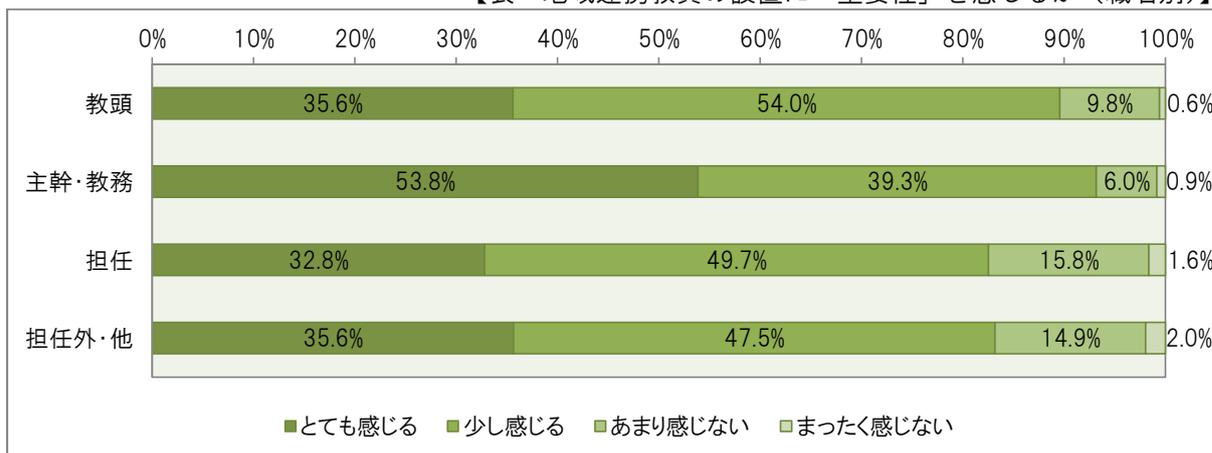
(教頭・主幹・教務 n=280 教諭 n=284)

(8) 職名別 問5.地域連携教員の設置に「重要性」を感じるか

ここでは、「主幹教諭」、「教務主任」を合わせたものを「主幹・教務」とし、「教諭(担任外)」、「その他(講師等)」を合わせたものを「担任外・他」として集計した。

「主幹・教務」の「とても感じる」の割合が著しく高い。

【表 地域連携教員の設置に「重要性」を感じるか(職名別)】



(教頭 n=163 主幹・教務 n=117 担任 n=183 担任外・他 n=101)

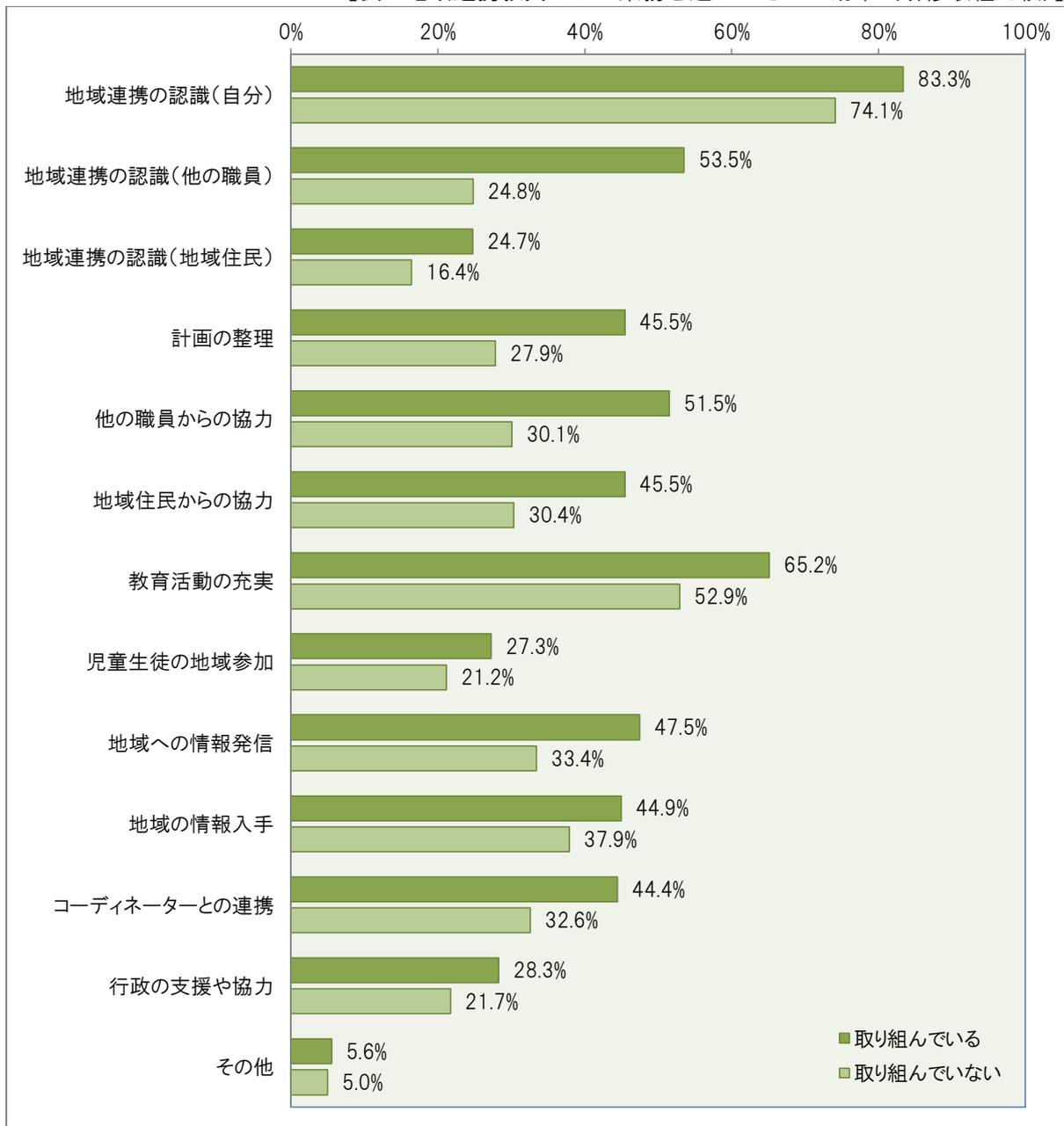
(9) 「研修に取り組んでいるかどうか」による比較

問6.地域連携教員として業務を進めてきての効果（複数回答）

ここでは、問2の「研修」の項目において、「十分取り組んでいる」、「ある程度取り組んでいる」と回答したものを「取り組んでいる」とし、「あまり取り組んでいない」、「取り組んでいない」と回答したものを「取り組んでいない」として分類したものを集計した。

研修に「取り組んでいる」の方が、全体的に効果を感じている割合が高く、研修に取り組むことが様々な効果を引き出すのに有効であることがうかがえる。特に「地域連携の認識(他の職員)」、「計画の整理」、「他の職員からの協力」、「地域住民からの協力」、「地域への情報発信」、「コーディネーターとの連携」では、10ポイント以上の差がみられる。

【表 地域連携教員として業務を進めてきての効果（研修取組比較）】



(取り組んでいる n=198 取り組んでいない n=359)

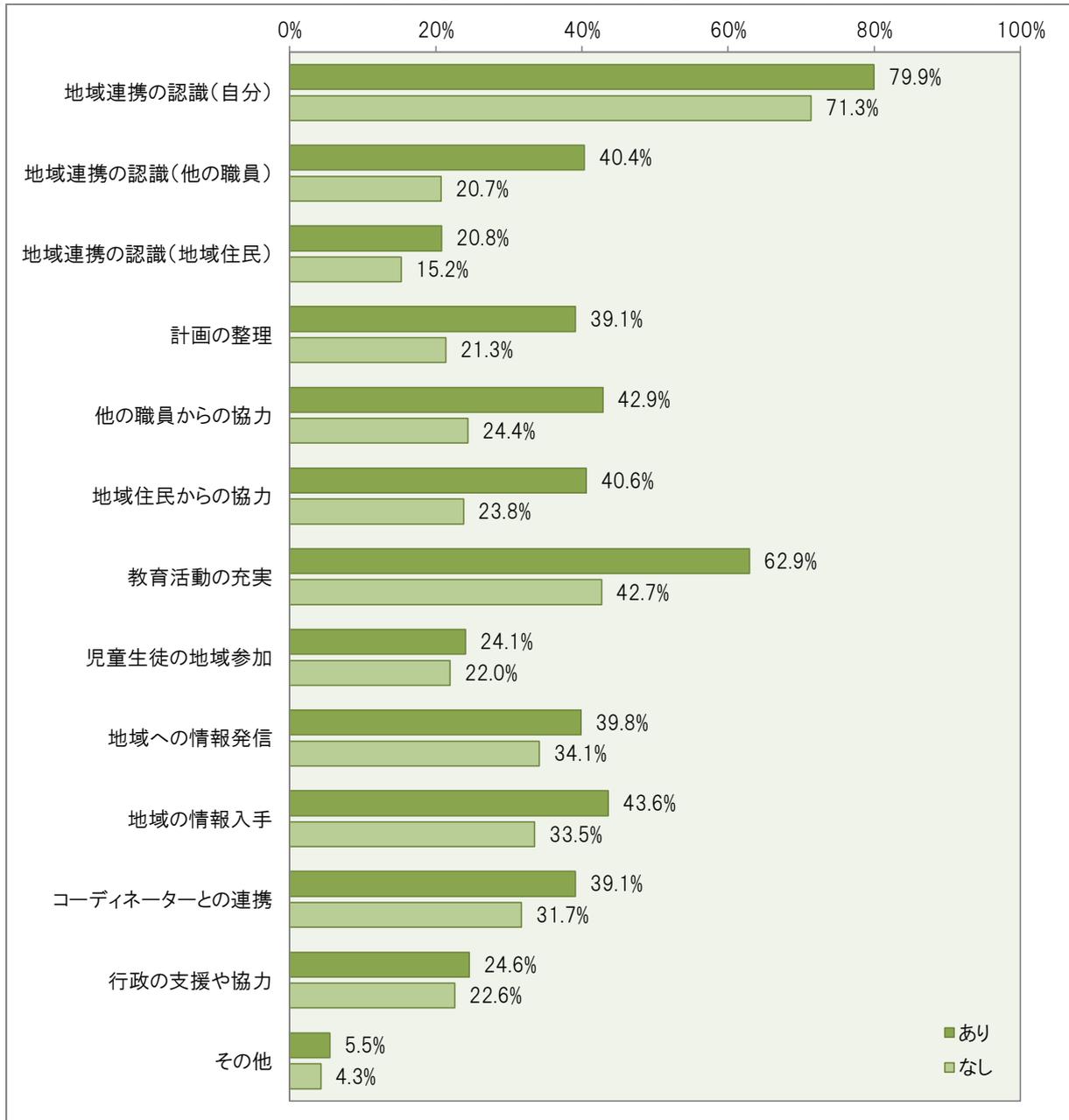
(10) 「チーム体制の有無」による比較

問6.地域連携教員として業務を進めてきての効果（複数回答）

ここでは、問4において、「はい」と回答したものを「チーム体制あり」とし、「いいえ」と回答したものを「チーム体制なし」として分類したものを集計した。

「チーム体制あり」の方が、全体的に効果を感じている割合が高く、チーム体制で取り組むことが様々な効果を引き出すのに有効であることがうかがえる。特に「地域連携の認識(他の職員)」、「計画の整理」、「他の職員からの協力」、「地域住民からの協力」、「教育活動の充実」、「地域の情報入手」では、10ポイント以上の差がみられる。

【表 地域連携教員として業務を進めてきての効果（チーム体制比較）】



(チーム体制あり n=399 チーム体制なし n=164)

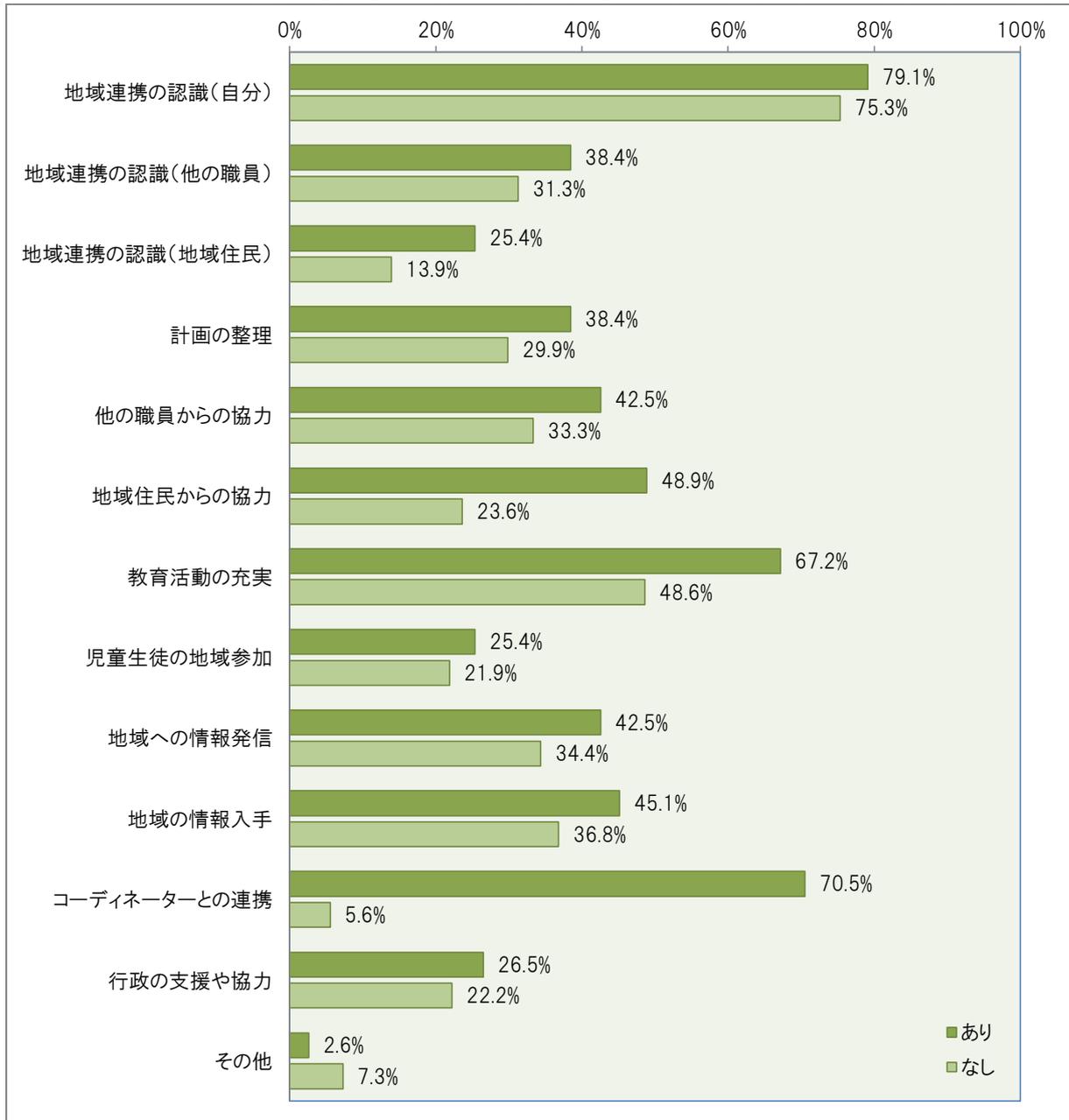
(11) 「コーディネーターの有無」による比較

問 6.地域連携教員として業務を進めてきての効果（複数回答）

ここでは、問 9 において、「コーディネーターあり」と回答したものと、「コーディネーターなし」と回答したものに分類して集計した。

「コーディネーターあり」の方が、全体的に効果を感じている割合が高く、コーディネーターを設置することが様々な効果を引き出すのに有効であることがうかがえる。特に「地域連携の認識(地域住民)」、「地域住民からの協力」、「教育活動の充実」では、10 ポイント以上の差がみられる。（「コーディネーターとの連携」は除く。）

【表 地域連携教員として業務を進めてきての効果（コーディネーター比較）】



(コーディネーターあり n=268 コーディネーターなし n=288)

第4章 ヒアリング調査から

1 協力者（県内地域連携教員 12名）

学 校	地域連携教員
宇都宮市立雀宮中学校	黒田 秀行 教諭 廣田 和之 教諭（平成26年度）
日光市立大沢中学校	神山 幸江 教諭
真岡市立物部小学校	高橋 美由紀 教諭
栃木市立都賀中学校	渡部 智裕 教諭
塩谷町立船生小学校	大田原 宣夫 教諭
那須塩原市立埼玉小学校	海老澤 康雄 教諭
佐野市立犬伏小学校	尾花 泰彦 教諭
栃木県立宇都宮南高等学校	針谷 英子 教諭
栃木県立宇都宮清陵高等学校	黒崎 照史 教諭
栃木県立烏山高等学校	藤井 啓太 教諭
栃木県立栃木特別支援学校	早乙女 陽一 教諭

2 調査のまとめ

以下に、上記12名の地域連携教員からヒアリング調査の際に得られた声を分類・整理してまとめた。「□」には「活動の実際」について、「○」には「活動の際の留意点や効果」について記載してある。

■校内計画の整備

- 新たな活動として地域連携活動を行うのではなく、今やっているもの、できるものをやるという方向性で取り組んでいる。
- 全体計画の中に「地域連携係」の役割を明記し、意識をもって取り組むことができるようにした。
- 計画作成の際、当初は校務分掌ごとに地域連携に関わる活動を洗い出して明示することも考えたが、束縛したり負担を感じたりすることを懸念し、詳細を記載することは取りやめた。
- 計画においては、常に洗い出しの意識をもっている。
 - ・ 重点的なものをピックアップ
 - ・ 「継続するもの」と「やめるもの」の分類整理
 - ・ 類似したものは統一して複数学年で実施（ただし「ねらい」の達成が可能か確認）
 - ・ 実施後の事業検証
- これまで、いろいろな地域連携活動がそれぞれの担当を窓口に行われてきたが、それら既に実施されていることを整理することが地域連携教員の役割だと考えている。
- 連携活動に関する情報を履歴として残す（例えば連携先の「代表者」「連絡先」「打合せ内容」「実際の様子」など）ことで、次年度以降の業務の効率化を図っている。
- 学年毎に作成した計画等の詳細を、係として一括してファイリングする。
- 学校全体で連携に関する活動を一覧にまとめ、それぞれの活動における窓口を、学校・地域について明確にしている。
- これまであった地域連携に関係する活動を、学年・教科・係（分掌）・行事・時期・内容など、それぞれの属性に分けて分類・整理した。
- 外部講師依頼一覧表の作成。（継続が決まっているものについて）
 - ・ ボランティアへの依頼時期が分かりやすい。
 - ・ 修正を加えつつ使用している。
- 今までのものを引き継ぎつつも「プラスワン」の気持ちは持つようにしている。

- 地域連携に関する業務について、学校全体を見通してまとめることで、全職員の共通理解の手助けになる。
- 連携をしていて、あまり効果のないものはやめる決断をすることが重要。
- 負担が大きくて児童生徒へのメリットが小さいもの、費用がかかるものは基本的には取り組まなくてよいと考えている。
- ある程度の役割分担は大切だが、それ以上に学校全体の地域連携に関する活動をまとめて整理することが重要であると思う。
- 一覧表を作成することで、活動が整理され、全職員で情報を共有することができる。
- いわゆる「人材バンク」を作成するのではなく、履歴としての情報を蓄積することが大切。
(連携先の代表者名・住所・連絡先・連携時の感想等)
- 教科や各種活動などに関連付けることで、組織として効率的に動くことができる。
- 各種計画の整理は将来的な負担減につながる。

■校内での共通理解

- 地域連携を取り上げた研修を実施し、無理に新たなものに取り組むのではなく、今やっている活動をできる範囲でよりよくなるように取り組んでいこうということを確認した。
- 外部講師を招いて「学校と地域の連携」をテーマにした研修を行った。本音を出し合い、有意義な時間となった。「めんどう」という本音と同時に「やってみたい」という意欲も出てきた。
- 地域についての理解を深めるワークショップを実施し、ふりかえりでは前向きなコメントが多数寄せられた。
- 地域教育協議会や地域コーディネーターなど、連携に関わる地域の方を職員全員が集まる場で紹介した。
- 職員会議資料に「地域との連携」項目を位置付け、毎月教職員への情報提供や啓発を行っている。
- 地域連携教員が職員会議において、「年間活動計画」の説明や手直し、ニーズ調査の依頼などを行い、職員間の共通理解を図るようにした。新任の職員には自校のコーディネーターとの連携のし方を丁寧に説明した。
- 計画書は必ず職員全員に配布するようにしている。
- 全校生徒に活動を知ってもらうために、校内の掲示板に写真を掲載した。
- 地域連携教員だよりの作成・地域連携活動関係掲示物コーナーの作成を行った。
- 職員室に大きく年間計画一覧表の掲示をした。
- 職員・生徒への周知のため、文化祭等の学校行事で活動紹介を行った。
 - 地域連携教育への理解が深まることによって、よさや効果を実感してもらえるようになり、職員の今後の取組への意欲が高まった。
 - 研修を機に地域連携の具体的なイメージが広がり、実際の活動に結び付いたものがあつた。きっかけ作りの重要性を感じた。
 - 研修での意見や提案を実現につなげる支援が今後必要になるかもしれない。
 - 全職員に関係者を知ってもらうことは、地域の方にとっても活動しやすい環境になる。

■管理職の理解

- 管理職へ事前に活動内容をある程度詳しく報告しておくことで、朝の打合せ等において話題提供をしてもらう。
- 管理職の指導の下、従来のシステムを踏襲しながらコーディネーターとの連携体制や教職員間の役割分担をしたことが大きい。
- 管理職の指導の下、地域と連携する基盤を築いてきたことが、前任の地域連携教員との引き継ぎを円滑にした。
- 関係者が来校した時には、管理職が常に顔を出してくれる。
 - 学校全体として打合せの時間を割いてもらえることは、管理職の理解によるところが大きい。
 - 管理職が地域連携の重要性について理解していると、的確な助言と十分な支援を受けることができる。
 - 関係者に対して、たった一言でも管理職が声をかけてくれるだけで、学校の印象がよくなり、連携がうまくいくことが多い。

■負担感の軽減

- 管理職を含め、チームで取り組む等に行っている。
- 「地域連携教育部」チームで分担して関わるようにしている。
 - ・計画・記録・報告書などの係分担
- 連携先との打合せは、できるだけ自分以外の関係教員にも同席してもらうようにしている。
- 地域連携教員の配置により、地域連携に関するすべての窓口になるのかという問題が生じたが、効率的・効果的に進めていくためには、これまでも地域と連携する活動に取り組んでいた係は、これまで同様その係が継続して窓口となって取り組むようにした。
- 活動を重ねていくうちに、少しずつ学年や担任が自立して動ける範囲を広げていく。
- 相手からの要望については、学校の現状を伝え、無理なものは無理と相手が納得できるよう丁寧に伝えている。
- 自治会長などの役員との関係づくり連絡・連携は校長、PTA 関係は教頭、地域住民やボランティア関係は地域連携教員という役割分担を行っている。
- 地域教材や地域人材の発掘、各学年への情報提供、各学年からの要請を関係者につなぐことを地域連携教員が行い、実施については担当学年に任せている。
- 自治会等の会議の際、学校の施設を積極的に貸与している。
- 外部との交渉には、できるだけメールを活用する。
- 授業中などの出迎えや連絡などは、事務職員や担任外の教員が率先して行っている。職員室の前黒板に予定が書かれており、それを見れば、関係者の来校がいつか分かるようになっている。
 - 職員の役割分担ができ、チームで動いていると、負担感を感じない。
 - 孤立は負担につながるが、チームで取り組めば、学校の組織力が向上する。
 - 地域連携教員は、全体のアドバイザー的な業務を行うこととしている。
 - 複数で打合せに参加することで、安心して役割分担をすることができる。打合せが複数回ある時などは、毎回主担当が参加しなくても引継ぎがしやすくなる。いろいろな教員に連携の過程を体験してもらうことができる。
 - 外部との連絡の手間を省くには、初めに顔を合わせておくことが大切。
 - 場所と時間の共有による効率化。
 - 過度な負担や責任を負わずに済む。
 - 任せるところは任せるという意識で。
 - 会議で話すより児童生徒からの発表を実際に見てもらう。

■地域との関わり

- 笑顔・挨拶・真摯な対応・感謝の気持ち。
- 地域と学校は対等の立場であることを心かけている。（尊重しつつも対等な関係づくり）
- 地域連携教員として地域の方とのふれあいを意識し、関係する行事や会議など、何かの時にちょっと「顔を出そう」「会話をしよう」「手助けをしよう」という心がけを忘れないようにしている。
- 地域のキーパーソン（地域のことをよく知っている人）や関係団体とのコミュニケーション。
- 地域活動における引率のときは、その場にいるいろいろな人に話しかけるようにしている。
- 「地域連携教員」の存在については、まだまだ十分に知られていない状況である。機会のあるごとに「地域連携教員の〇〇です。」と言うことで、少しでも知ってもらえるようにし、まずはお互いに顔のわかる関係を築いている。
- 「〇〇学校 地域連携教員」という文字の入った名刺を作成した。
- 「地域の中の学校」を目指すために、まずは学校を知ってもらい、学校に来てもらうことを念頭に活動している。「学校に行ってみようかな」と思ってもらえるようなアプローチをする。
- 様々な場面で学校の地域連携に関する活動の情報や児童生徒のよさを積極的に伝えている。
 - ・地域連携コーナーの設置
 - ・HPでのPRによる広報。
 - ・自治会の回覧板
 - ・来校した保護者や高齢者
- 色々な場面で、学校には「地域連携教員がいる」ということを伝えている。
- 学校に対してある種の先入観のようなものを持っている人には、特に気を遣って対応している。
- 登下校の見回りは、児童生徒の安全確保とともに、地域の方とあいさつをしたり顔を合わせたりする絶好の機会と考えている。
- 通学路クリーン活動を個人的な活動として行っている。
 - 地域も学校も共に気を遣い過ぎずに活動できることが望ましいと考えている。

- たった一言でも、声をかけるだけでも効果は大きい。
- 積極的に自分から動いて情報を収集することが大切。
- 学校の先生が来たというだけで地域の人は喜んでくれる。
- 地域活動に関わる人は、だいたい複数のものに関わっているため、別の時に「あの時の○○先生だね。」となり、ネットワークが広がり、その後の連携がうまくいく。
- 「相手の顔を覚える」「自分の顔を覚えてもらう」ことが大切。いざ何かをしようとするときに円滑に事が運ぶ。
- 名刺作成は、簡単で単純かもしれないが、持っていれば意外に役に立つことが多い。
- 積極的な情報の発信。単純ではあるが、続けることに意味がある。
- 保護者や地域住民から学校への些細な協力や関心も、連携活動への第一歩。小さなことからの積み重ねが信頼へつながると考えている。
- 相手の話をよく聞くことを、相手の人柄を理解し、信頼関係を築く一歩としている。

■連携する時は

- 依頼のあった段階で、「何をしたいのか、ねらいは何か、活動内容はどんなものか」を具体的にした上でコーディネート始める。
- 「体験あって学びなし」「地域や保護者との交流がゴール」とならないよう、活動の目的を把握した上で、相手との打合せを行っている。
- 教員ということあまり意識せず、人間として1対1の付き合いを心がけている。
 - ・できないことを隠さない
 - ・素直に助けてほしい気持ちを表す
 - ・学校のありのままを伝える
 - ・甘えることも大切
- 相手もその道のプロであるから、尊敬する気持ちを忘れずに、「アドバイスしてもらいたい」「教えていただきたい」という姿勢を忘れずにいる。また、相手のやり方やよさを学校に生かすにはどうすればよいかを考えている。
- 地域連携教員であっても「分からないことは、分からない」と伝えることで、教えてもらいながらよりよい関係づくりにつながっている。
- 計画は早めに伝えることで相手に時間的な負担をかけないようにしている。
- 連携を始めるときには、「一緒に児童生徒を育ててもらいたい。」ということをお互いによく伝えると同時に、「やってください」ではなく「お願いします」という姿勢で臨んでいる。
- 相手の立場を尊重し、できるだけ相手の話を先に聞くことによって、相手の「できること」「できないこと」を初めに把握しておくようにしている。
- 相手側の事業へボランティアとして参加する時でも、児童生徒の教育活動の一環として「参加させていただいている」という姿勢を忘れないように心がけている。
- 自分で何とかするのではなく、つながれる人・頼れる人を作る。(気の合う同僚)
- 地域連携教員が全て行うのではなく、活動の計画は実際に関わる学年(係)が行う。地域連携教員は、あくまでもつなぎの役割で、学年(係)と連携先の関係づくりを支援する。
- 連携に関する依頼があったときは、「地域のコーディネーターに相談する」ことも地域連携教員の仕事と考えている。ただし、その後の打合せに関しては、初期段階は必要に応じて同席するようになっている。
- 地域の教育力を育てるためにも、学校に関わり過ぎないようにする必要もある。
- 地域行事への参加などの場合は、学校は参加者を募り、当日の指導は地域に任せ、職員は見守る程度にしている。
- 児童生徒向けの事前指導を丁寧に行っている。
 - (・タイムスケジュール・活動内容・挨拶の徹底など)
- 事後には、お礼だけでなく、児童生徒の様子やねらいの達成度などを伝えるようにしている。
 - 「誰かを呼べばそれでよし」ではなく、連携することによって「児童生徒に何を」という「ねらい」を忘れず、また相手とも共有することが必要。
 - 相手にも学校にも得意な分野と苦手な分野があるので、お互いに補い合っていていこうというスタンスが大切。
 - 例え相手からの依頼に協力しているのだとしても、「こちらも学びの機会を得ているのだから、感謝している」という姿勢は崩さない。(間違っても「協力してあげている」という気持ちは

持たないようにし、無理に連携はしない。)

- 正直にこちらの弱みを伝えることによって、相手からの自主的・自発的な支援を得ることができる。
- しっかりと打合せをする。もちろん相談にももの。中途半端な状態でのスタートは、後でつまづくことが多い。
- 声をかけるだけでも、一緒に協力してくれる仲間はたくさんいる。逆に、形式にこだわって、正式な文書などで依頼してしまうと相手も責任を感じてかきこまってしまう。頼む相手や場合によって、その時々で判断する必要がある。
- 連携先が決まれば、後は全て学年(係)に任せることが理想であるが、新規の連携であれば初期の丁寧な対応は必要である。
- 児童生徒の心の準備が十分にできていると、当日の活動に余裕が生まれて交流が深まり、充実した活動になる。
- 次回につながる「関係づくり」と「ふりかえり」を忘れずに。

■児童生徒に関すること

- 地域連携教員となって活動をして「地域・保護者・生徒・同僚とのつながり」が増え、結果、それに伴って活動も増えてきたため、今までできなかったような経験を生徒に提供することができた。
- ボランティア関係の研修に参加した児童生徒が、研修後にボランティアに関心をもつようになってきている。今後さらに推奨したい。
- 高校生は地域との関係がブツリと切れてしまう、もしくは細くなってしまう時期である。各種活動は基本的に希望者を募り取り組んでいるが、活動に参加している高校生を見ると、こちらが思っている以上に自立していて、積極的に関わることもできる。他者との関わりもうまくできるし、苦手な子でもきっかけさえ与えればできる。
 - 地域について知る、地域の人とふれあうことで地域への愛着や誇りを持つことにつながる。
 - 従来の学校生活だけでは目立たないまま終わってしまうような児童生徒にスポットライトを当てることができる。また、ボランティア活動はいろいろな人と関わる活動を通して情操面での教育上の効果が大きい。
 - 地域連携活動をすることで、児童生徒のコミュニケーション力は間違いなく向上する。これは、先を考えれば、将来、一市民として地域で生活していくうえで必要不可欠なものだと思う。
 - 高校生は、地域とのつながりを切れ目なく持つことで、もっともっと地域で活躍することができるし、その後も活躍し続けることができる。

■職員に関すること

- 地域連携に対して、ほとんどの職員がやっていることには肯定的であるが、自分から積極的にやることに対しては、まだ抵抗を感じている部分もある。
- 地域連携に関して、興味があったり必要性を感じていたりする先生は多い。しかし、実際にはどうすればよいのかわからず、一步を踏み出せないでいる人も多いのではないかと。今回、地域連携教員が設置されたことにより、学校がそのような先生をサポートする体制が整いつつある。
- 地域連携に関して、今までは個人でやっていた先生が多いと思う。これを学校の取組として整理し、広げるために、地域連携教員が設置されたことが大きいと思う。教師も人間であるから「得手」「不得手」がある。これを学校として誰もが扱いやすくカスタマイズしていくことが地域連携教員に求められるのかもしれない。
- ある先生がやりたいと思っていながらもなかなか実現に至らなかった連携が、地域連携教員が設置されたおかげで、こちらが一声かけてコーディネートすることによって実現した。
 - 「みなさんもやってください。」ではなく、「楽しくやっている姿」や「やったことによる成果」を発表・掲示などすることによって啓発し、じわじわとよさを伝えたい。
 - 職員の地域連携への意識の壁を取り除いていくことが大切。
 - 前向きに一步踏み出す気持ちが、連携活動の実現につながる。

■地域連携教員として雑感

- 同校種の地域連携教員に呼びかけ、ネットワーク作りを目指して情報交換会を企画した。
- 同地区高校の地域連携教員とメールでグルーピングし、情報提供・交換等をしている。各種会議や研修なども「予定を合わせて参加しよう。」などの声かけもしている。
- 地域連携教員として校務分掌に位置付けられたことによって、「何かしなければ」「何かやろう」という自覚や責任感のような意識が芽生えた。(これまでは漠然と「やれるようであれば何かやろう」という感じだった。)
- 高校は、これまで「県立だから地域(市町の施設)との連携は関係ない」という感覚があったが、地域連携教員が設置されたことで、改めて「高校も地域の学校である」という意識が強くなった。
- これまでも学社連携等、意識はされてきたが説得力が弱い感じがしていた。地域連携教員が設置されたことにより、地域と連携した活動をする事の重要性について伝えやすくなった。
- 役割分担を決めることは大切であるが、明確に決めてしまうこと、かえって不都合や余計な負担につながってしまうと感じている。
- 職員の負担は思ったほど大きくない。継続して軌道に乗ることでさらに負担は減ると思う。
- 自分が地域連携に関する仕事が好きだから、多忙感をさほど感じずにいる。
- まだまだ理解が十分でない。やらなくてもよい、余計なものであるという認識を持っている教員もいる。
- 地域との連携を充実させることはとても大切なことであると思っているが、やり過ぎることは学校への負担になる。適度な充実とはどの程度なものなのかを考えていきたい。
- 教材研究を兼ねて、できるだけ地域へ出向き、常に「地域とつながることはできないか」「利用できる施設はないか」という目線で見ようとしている。
- 地域を「教室」「教科書」「教材」としての視点で見ようとし、また、地域にとらわれず、子どもたちにとって有意義な出会いとなる可能性を感じるものは、積極的に招聘している。
 - 社会教育主事有資格者ではない地域連携教員は、不安感がとても大きいと思うが、情報交換会をとおして、悩みを共有することで不安感を解消したり、いろいろな情報を得ることで業務の見通しを立てたりすることができると思う。
 - 外に出ることで、または何か新しいことに挑戦することで、新しいつながりが生まれ、次の新しい活動へと広がる。
 - チャンスはたくさん転がっている。いかに見つけて生かすか。地域連携教員の設置により、「見つける機会」も「生かす機会」も増えたと思う。
 - 今の職場での人間関係や児童生徒が学校にいる時間は人生の一瞬でしかない。職員も児童生徒も、一人の地域住民として人生を長い目で見ることによって、地域とつながることの大切さを感じてもらいたいと思っている。
 - いつもより少し地域に目を向けるだけでも情報は得ることができる。
 - 地域には子どもうちに出会っておくべき大人がいる。
 - 地域に対するアンテナを高くすると自然に情報が入ってくる。

■地域連携に関する事例(小学校)

- 地域住民のサークル活動団体の作品展示
- ALTによる英会話体験
 - ・地域住民対象
 - ・ALTはボランティアとして活動
- 公民館と連携した家庭教育学級の開催
- 地域の祭りへの参加
- 高齢者福祉施設との交流
- 地元県立高等学校との交流イベント
- 学校支援ボランティアへの積極的な依頼
- 地域住民による清掃ボランティア
 - まずは地域の大人をどんどん学校に迎え入れ、地域との関わりをたくさんもつことから。

■地域連携に関する事例（中学校）

学校課題解決を目指した地域連携活動

- ・生徒指導上や学習指導上の課題を学校だけではなく「地域の課題」として
- ・学習支援 ・部活動支援 ・キャリア教育支援 など
- ・地域の大人が見てくれるだけで生徒指導上の効果大

地域の社会教育施設のイベントへの参加

- ・活動支援ボランティアとして ・企画者として

地区清掃ボランティア活動

- 小学校での経験をもとに、少しずつ自分たちの力を地域に還元していくことで、地域住民の一員であるという自覚をもてるように。

■地域連携に関する事例（高等学校）

地域連携（地域と関わる活動）を目的とする部活動の設立

YMCA と協力したボランティア同好会による活動

- ・生徒が自主的に他団体と連絡を取りながら活動の範囲を拡大

ロータリークラブと連携した活動

- ・留学生の受入 ・緑化運動 ・清掃活動 ・災害学習 ・募金活動 など

市立図書館と連携した活動

- ・生徒の作品（写真部・クリエイティブアート部・書道部）を図書館に展示
- ・近隣校と一緒にビブリオバトルの開催 ・図書館のお祭りへの参加 など

近隣小学校への協力

- ・部活の特性に応じた学習支援活動

吹奏楽部による地域イベントでの演奏活動

学校開放事業（公開講座）

- ・学校として地域に貢献する ・職員や地域住民などを講師に
- ・生徒と地域住民がともに学ぶ場 ・対象は中学生～一般まで

大学と連携した活動（大学の施設を利用した体験授業）

地域連携活動をキャリア教育の充実に生かす

- 高校生になれば、動ける範囲も飛躍的に広がり、自主的に活動の幅を広げることもでき、可能性は無限大である。地域貢献から社会貢献へ。
- 生徒のよりよい進路選択につながる。

■地域連携に関する事例（特別支援学校）

学校から積極的に地域とつながる仕掛けづくり

- ・自治会の会議への参加 ・地区の行事への参加（敬老会行事への児童生徒引率）
- ・他校の高校生との交流 ・市教育委員会や地区の公民館との連携

- まずは、とにかくこちらから働きかけることが大切。もっと自分たちを知ってもらうことで、地域連携に加えて共存社会の実現を目指して。

第5章 まとめと提言

今回の調査結果は、地域連携教員設置2年目であることから、未だ活動自体も模索段階にある中での実態調査であったことやさらに標本数564のうち342(61%)が小学校であることから全体の傾向として小学校における実態が浮かび上がっていることなどをふまえておきたい。

実態として、地域連携教員は小中学校では一般教員が発令されているのは3割程度であり、大半は主幹教諭、教務主任、副校長・教頭が発令されている。したがって50歳代の教員が多くなっている。社会教育主事の資格の有無については約半数が資格を取得している。

I 地域連携教員を学校教育法等に基づく教職員定数として算定し、国庫負担の対象とすること。

調査では、地域連携教員の負担感が大きいことがうかがわれている。しかし、その重要性や必要性についても同時に理解されていることもわかっている。よって、地域連携教員が地域連携の窓口として機能するためには、その職務に専念できる体制を整備する必要がある。

担任を持ちながら地域連携教員の任につくことは、教員の負担軽減のという観点からも解消されるべきことである。そのためには、教員定数を増加し、各学校に少なくとも1名の教員が配置されることが必要である。これは栃木県単独で実施するのではなく、国に強く要望していくことが必要と思われる。

II 地域連携教員の養成と研修を充実すること。

調査では、地域連携教員のうち半数程度が社会教育主事有資格者である。地域連携教員の設置は、社会教育主事有資格者の活用という意味もあり、関係校務分掌に有資格者を配置するなどの工夫がなされることが大切である。しかし、現在行われている社会教育主事講習だけでは有資格者を十分に供給することは難しく、今後さらに有資格者を増やす必要がある。また、地域連携教員の養成としての観点からも、社会教育についての知識や理解は重要であり、社会教育主事講習を基軸としながらも、その柔軟な運営や県教育委員会として実質的な研修制度を検討する必要がある。

例えば、講習科目の一部を県教育委員会と宇都宮大学が共催で別の日程で開設して単位認定を行い、分割履修を可能とすることや、県総合教育センターの既存の研修の時間数を充足させて、科目の一部と代替できるように調整することなどが考えられる。また、大学在学時に取得した社会教育主事(補)の資格取得者についても該当者を対象とした研修を行うことによって、有資格教員と同等に取り扱うことや科目代替を可能とするなども検討してよいと思われる。

また、調査では、地域連携教員として担っている業務や取組状況で最も低いのが「研修」に関わることである。確かに校内研修を担当する校務分掌は別に設けられている場合が多く、地域連携教員が担うことに難しさはあるが、これは同時に地域連携に関する研修について課題があることが明らかになったことも意味する。県教育委員会が行う「地域連携教員研修」において、「校内研修の企画立案やその方法などについての知識や技術」を学ぶ内容を取り入れる必要もある。その際、研修対象として地域連携教員だけでなく、地域連携教員を含む校務分掌を担当する教員も対象とすることも検討されてよいと考えられる。

III 地域連携教員を核としたチーム体制による地域連携事業の充実を図ること。

調査では、おおよそ3割が「自分が中心」と回答し、7割が「役割を分担している」と回答している。役割分担による記述内容を見ると学校の規模や職員の年齢構成、教頭や教務主任が併任している場合とそうでない場合とでは大きく異なる。栃木県の特徴として、地域連携教員は校務分掌上、地域連携係、渉外係、生涯学習係などに置かれているが、そうした分掌に所属する他の教員との役割分担や協力体制が重要である。さらには地域コーディネーターが配置されている学校ではコーディネーターとの役割分担、チーム体制を整備することが重要である。問題は地域連携教員が一人で抱え込まないということである。チームとして動けるかが重要であるが、その際、管理職、教務主任、校務分掌に所属する教員、地域コーディネーターなどで構成された「チーム地域連携」としての合意と役割分担が必要である。

また、平成27年12月の中教審答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策」(チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会)では、さらに専門性に基づくチーム体制について言及している。すなわち校内だけでなく、警察、消防、保健所、児童相談所、福祉部局、医療機関、弁護士会、NPO等の関係機関や専門的な団体との連携が含意されている。地域連携は学校支援ボランティアの受け入れや地元の団体との共催事業の企画実施だけに止まらず、広く学校課題の解決に貢献するものと

してとらえられている。そのためには、地域連携教員が今後校内研修などの機会をいかして、こうした関係する専門的な機関や団体についての学習会や担当者を招聘しての研修などを企画すべきである。

IV 地域コーディネーターの配置を促進すること。

調査では、地域コーディネーターが配置されている学校は約半数程度であった。同時に地域コーディネーターとの連携を重要視していることもわかっており、地域コーディネーターが配置されている場合の方が地域連携の効果を感じている割合が高い。地域コーディネーターは、学校支援地域本部事業の際に配置されたケースが多いが、主として小中学校に1~2名程度配置されている。地域コーディネーターの活動内容は学校によって大きく異なり、業務内容も多様であるが、意欲的に活動している学校では、学校支援ボランティアのコーディネートだけでなく、地域との様々な連携窓口として機能しているケースもみられる。多忙な地域連携教員にとって最も重要なパートナーであるといえる。地域コーディネーターの配置は地域連携教員の今後の活動展開に大きな影響を与えるものとなる。これは特にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等とともに市町の教育委員会で予算措置され、配置されることが望ましい。特に地域コーディネーターは、今後は単なる学校支援に止まらず、学校を核とした地域づくりを支えるコーディネーターとして機能していくと考えられる。

平成27年12月の中教審答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」では、学校支援地域本部から地域学校協働本部への発展が提言され、その必須の要素として「①コーディネート機能」、「②多様な活動（より多くの地域住民の参画による多様な地域学校協働本部活動の実施）」、「③継続的な活動（地域学校協働活動の継続的・安定的実施）」があげられている。その際、学校の教員だけでコーディネートするのは現実的ではなく、地域住民の中から地域コーディネーターが配置され、地域連携教員とのパートナーシップのもとに協働事業を企画実施していくことが期待されていると考えられる。

V 社会に開かれた教育課程と地域学校協働本部へ向けての体制整備をすること。

次の新しい教育課程では「社会に開かれた教育課程」が論点となる。中教審答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」では、社会に開かれた教育課程とは「①社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと」、「②これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育ていくこと」、「③教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること」と示されている。

これは、今後の学校教育は地域や社会教育との連携・協働を抜きに運営することはできないことを示すものとなっている。したがって全教職員に地域や社会教育の基礎的素養を身につけさせることが必要になってこよう。特に社会教育との連携について、栃木県は「教員を社会教育主事講習へ派遣する制度」をもっており、こうした体制整備にはこれまでも取り組んできた。しかし、社会に開かれた教育課程となる時、それは地域連携教員や社会教育主事有資格教員の問題ではなく、全教職員の問題となることを意味する。同時に市町の教育委員会の社会教育担当もこのことを意識する必要がある。幸い栃木県では、教員を市町で直接割愛して社会教育主事として任用するケースも見られ、学校との連携で効果をあげている事例もみられる。こうした事例が県内に広く拡大し、学校教育部局だけでなく、社会教育行政の側からも「社会に開かれた教育課程」に対応する必要がある。学校がいくら教育課程を社会に開いても、それを受け止める地域や住民の教育的見識が不十分であれば学校が十全に機能しないことになる。このことはIVで述べた「地域学校協働本部」にもいえる。学校に地域連携教員を配置し、地域コーディネーターを配置して体制を整備しても地元の教育委員会では社会教育主事さえ配置されていないとすれば、その効果をあげることは困難である。学校が社会に開かれるとともに受け止める地域住民の学習の場を積極的に創造していくことが必要である。そのためにも市町教育委員会では、少なくとも社会教育主事を配置すること、さらに教員出身の社会教育主事を任用するなど積極的に学校を核とした地域づくりに貢献する必要がある。

【参考資料1】地域連携教員の設置に関する指針

地域連携教員の設置に関する指針

(平成26年2月14日栃木県教育委員会教育長決裁)

第1 目的

各学校に地域連携に携わる教員を「地域連携教員」として設置することにより、学校と地域が連携した教育活動を、生涯学習の視点から効果的・効率的に展開することを目的とする。

第2 対象

本指針の対象校は、栃木県内の公立学校（小学校、中学校、高等学校、特別支援学校）とする。

第3 指名

地域連携教員は、対象校の教職員であって、次に該当する者のうちから、所属校の校長が指名し校務分掌に位置づける。

- (1) 社会教育法（昭和24年法律第207号）第9条の4に規定する社会教育主事の資格を有する者
- (2) 校長、教頭でない者
- (3) 学校の状況により、(1)(2)の要件を満たす者を指名できない場合には、教頭も含め以下の要件を満たす教員を指名する。
 - ① 地域と関わる教育活動に積極的に取り組み、力を発揮していると認められる者又は学校と地域との連携において優れた実践力を有すると認められる者
 - ② 学校と地域との連携の重要性を十分に理解し、地域連携業務を推進する意欲を有すると認められる者

第4 職務

地域連携教員は主に次の業務を行うものとする。

- (1) 学校と地域が連携した取組の総合調整に関する事
- (2) 学校と地域が連携した取組の連絡調整や情報収集に関する事
- (3) 学校と地域が連携した取組の充実に関する事

第5 留意事項

- (1) 地域連携教員は、前項の業務を行うに当たっては、教育基本法（平成18年法律第120号）その他の関連法令の趣旨を踏まえ、生涯学習の視点に立って行わなければならない。
- (2) 校長は、地域連携教員が果たすべき職責を鑑み、校務上の調整、研修への参加、その他の必要な配慮を行うよう努めるものとする。

第6 任期

- (1) 地域連携教員の任期は、指名された日の属する年度の末日までとする。
- (2) 地域連携教員は、再任されることができる。

第7 その他

- (1) 県教育委員会は、地域連携教員が十分に職務を遂行することができるよう、研修その他必要な支援を講ずるよう努めるものとする。
- (2) 県教育委員会は、地域連携教員の活動状況の把握に努めるものとする。
- (3) 県教育委員会は、地域連携教員の設置に関して評価を行い、必要に応じて指針の見直しを図ることとする。

第8 委任

この指針の実施細目は、別に定める。

附 則

この指針は、平成26年4月1日から実施する。

【参考資料 2】地域連携教員活動状況調査 調査票

地域連携教員活動状況調査【調査票】

※記述以外の回答については、あてはまる欄に「1」をご入力ください。

基礎データ

■ 所属校名

所在市町

校種 小学校 中学校 高等学校 特別支援学校

児童生徒数 ~50 51~100 101~150 151~200 201~250 251~300
 301~350 351~400 401~450 451~500 501~

■ 回答者(地域連携教員)名

年代 20代 30代 40代 50代~

職名 教頭(副校長) 主幹教諭 教務主任
 教諭(担任) 教諭(担任外) その他(講師等)

地域連携教員の経験年数 1年目 2年目

社会教育主事の資格 有 無

調査項目

問1~問3については、右表のa~hを見ながら回答してください。

■ 問1.地域連携教員としてどのような業務を担っていますか。あてはまるものをすべてお答えください。

a「計画」 b「研修」 c「情報」 d「連絡」 e「実践」 f「支援」 g「評価」
 h「その他」(下の欄に具体的にご記入ください)

■ 問2.地域連携教員として、a~hの業務について、現在どの程度取り組んでいますか。

それぞれについてお答えください。

a「計画」	<input type="checkbox"/> 十分取り組んでいる	<input type="checkbox"/> ある程度取り組んでいる	<input type="checkbox"/> あまり取り組んでいない	<input type="checkbox"/> 取り組んでいない
b「研修」	<input type="checkbox"/> 十分取り組んでいる	<input type="checkbox"/> ある程度取り組んでいる	<input type="checkbox"/> あまり取り組んでいない	<input type="checkbox"/> 取り組んでいない
c「情報」	<input type="checkbox"/> 十分取り組んでいる	<input type="checkbox"/> ある程度取り組んでいる	<input type="checkbox"/> あまり取り組んでいない	<input type="checkbox"/> 取り組んでいない
d「連絡」	<input type="checkbox"/> 十分取り組んでいる	<input type="checkbox"/> ある程度取り組んでいる	<input type="checkbox"/> あまり取り組んでいない	<input type="checkbox"/> 取り組んでいない
e「実践」	<input type="checkbox"/> 十分取り組んでいる	<input type="checkbox"/> ある程度取り組んでいる	<input type="checkbox"/> あまり取り組んでいない	<input type="checkbox"/> 取り組んでいない
f「支援」	<input type="checkbox"/> 十分取り組んでいる	<input type="checkbox"/> ある程度取り組んでいる	<input type="checkbox"/> あまり取り組んでいない	<input type="checkbox"/> 取り組んでいない
g「評価」	<input type="checkbox"/> 十分取り組んでいる	<input type="checkbox"/> ある程度取り組んでいる	<input type="checkbox"/> あまり取り組んでいない	<input type="checkbox"/> 取り組んでいない

■ 問3.地域連携教員として、a~hの業務について、「やりがい」や「意欲」をどの程度感じますか。

それぞれについてお答えください。

a「計画」	<input type="checkbox"/> とても感じる	<input type="checkbox"/> 少し感じる	<input type="checkbox"/> あまり感じない	<input type="checkbox"/> まったく感じない
b「研修」	<input type="checkbox"/> とても感じる	<input type="checkbox"/> 少し感じる	<input type="checkbox"/> あまり感じない	<input type="checkbox"/> まったく感じない
c「情報」	<input type="checkbox"/> とても感じる	<input type="checkbox"/> 少し感じる	<input type="checkbox"/> あまり感じない	<input type="checkbox"/> まったく感じない
d「連絡」	<input type="checkbox"/> とても感じる	<input type="checkbox"/> 少し感じる	<input type="checkbox"/> あまり感じない	<input type="checkbox"/> まったく感じない
e「実践」	<input type="checkbox"/> とても感じる	<input type="checkbox"/> 少し感じる	<input type="checkbox"/> あまり感じない	<input type="checkbox"/> まったく感じない
f「支援」	<input type="checkbox"/> とても感じる	<input type="checkbox"/> 少し感じる	<input type="checkbox"/> あまり感じない	<input type="checkbox"/> まったく感じない
g「評価」	<input type="checkbox"/> とても感じる	<input type="checkbox"/> 少し感じる	<input type="checkbox"/> あまり感じない	<input type="checkbox"/> まったく感じない

■ 問4.地域連携に関する取組はチーム体制で進めていますか。

「いいえ」: 自分(地域連携教員)がほとんど中心になって取り組んでいる。
 「はい」: 役割を分担したり、必要に応じて協力を得たりして取り組んでいる。

※「はい」と回答した方は、分担内容を上の欄に具体的にご記入ください。

■ 問5.「地域連携教員の設置」に「重要性」を感じますか。

とても感じる 少し感じる あまり感じない まったく感じない

■ 問6.地域連携教員として業務を進めてきて、どのような効果を感じていますか。

あてはまるものをすべてお答えください。

- 自分が地域連携の重要性や必要性の認識を高めることができた。
 他の職員が地域連携の重要性や必要性の認識を高めることができた。
 地域住民が地域連携の重要性や必要性の認識を高めることができた。
- 地域連携に関する諸計画が整理され、業務が効果的・効率的にできるようになった。
 他の職員から地域連携に関する活動に対して協力を得やすくなった。
 地域住民から地域連携に関する活動に対して協力を得やすくなった。
- 地域の教育資源を取り入れた学校の教育活動が充実した。
 地域の活動に参加する児童生徒が増えた。
- 学校から地域への情報発信が増えた。
 地域に関する情報が増えた。
- コーディネーター(地域の窓口となる人)との連携が深まった。
 行政の支援や協力を得やすくなった。
- その他(下の欄に具体的にご記入ください)

■ 問7.地域連携教員として業務を進めてきて、どのような課題を感じていますか。

あてはまるものをすべてお答えください。

- 自分が地域連携教員または地域連携についてよく理解していない。
 他の職員が地域連携教員または地域連携についてよく理解していない。
 地域住民が地域連携教員または地域連携についてよく理解していない。
- 地域連携に関する諸計画が十分に整理されていない。
 他の職員から地域連携に関する活動に対して十分な協力を得ることができない。
 地域住民から地域連携に関する活動に対して十分な協力を得ることができない。
- 学校の教育活動に地域の教育資源を取り入れる方法がわからない。
 地域の活動に児童生徒を参加させる方法がわからない。
- 学校から地域への情報発信が十分に行われていない。
 学校が地域の情報を十分に収集していない。
- コーディネーター(地域の窓口となる人)との連絡調整がうまくできない。または、コーディネーターがいない。
 他の業務が多忙なため、地域連携に関する業務に携わる時間が十分に取れない。
 行政の支援や協力を十分に得ることができない。
- その他(下の欄に具体的にご記入ください)

■ 問8.今後、「問7」の課題を解決したり、地域連携教員としての活動をさらに充実させたりするために必要だと思うことがあれば下の欄にご記入ください。

■ 問9.コーディネーター(地域の窓口となる人)についてお聞きます。

- コーディネーターの有無 有 無

※以下、「有」と答えた方のみお答えください。

- コーディネーターの人数 1人 2人 3人 4人 5人以上
 コーディネーターとの連携・協力によって実施できた効果的な活動があればご記入ください。

- コーディネーターがいることによる利点や効果などがあればご記入ください。

■ 問10.その他、地域連携教員となつてのご意見や感想など、ご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。回答が終わりましたら、上書き保存したデータをEメールに添付してご報告ください。

問1～問3については、表のa～hを見ながら回答してください。

地域連携教員の業務内容分類	
<p>■学校と地域が連携した取組の総合調整に関すること</p> <p><u>a.地域連携に関する計画の作成及び見直し</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体計画の作成・見直し ・年間活動計画の作成・見直し ・地域連携活動の他教科等への関連付け <p><u>b.地域連携に関する校内研修の企画・運営</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・職員対象研修の企画・運営 ・保護者対象研修の企画・運営 ・地域住民対象研修の企画・運営 <p>■学校と地域が連携した取組の連絡調整や情報収集・発信に関すること</p> <p><u>c.地域連携に関する情報収集・発信</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校の情報発信 ・地域の情報収集 ・校外研修会への参加と報告 <p><u>d.地域連携に関する活動の連絡調整</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・県・市町教育委員会関係との連絡窓口 ・外部団体やボランティアとの連絡調整 ・校内のコーディネーターとの連絡調整 	<p>■学校と地域が連携した取組の充実にに関すること</p> <p><u>e.地域連携に関する活動の実践</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自身の特性に応じた地域連携活動の計画・実践 ・自校の特色に応じた地域連携活動の計画・実践 <p><u>f.地域連携に関する活動への支援</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員が行う地域連携活動への支援 ・地域で行われている地域連携活動への支援 <p><u>g.計画や活動についての評価</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画や活動についての評価計画作成 ・今後への工夫・改善策の提案 <p>■その他に関すること</p> <p><u>h.回答用紙に具体的にお答えください</u></p>

※この分類は、「学校と地域を結ぶ地域連携教員のハンドブック(栃木県教育委員会 平成27年4月)」P10「ガイド5 地域連携教員の職務」をもとに作成した。

【参考資料3】地域連携教員活動状況調査 問10 記述内容一覧

ここは「自由記述」であるため、回答者からの記述内容をそのままの表現で一覧にして記載した。

■小学校 教頭

- 小学校における地域連携にかかわる活動は、学習内容と密接にかかわっているため、学習を進める学年の担当者が連絡調整しなければならない。したがって地域連携教員となっても、具体的な動きは出来ないのが現状である。一方、地域の行事とのかかわりについては、学校の窓口は教頭になっているため、連携はしやすいという利点はある。
- 社会教育主事の資格に関わらず、学校の状況に応じた教員が担当できるようにしてほしい。
- 副校長として行ってきた（行っている）業務との違いが感じられないのは、地域連携教員としてやらなければならないことを、まだ、きちんと理解していないのかもしれないと反省している。
- 今後ともがんばっていきたいと思います。
- 地域連携教員が副校長ではなく、社教主事資格者に割り当てて活躍してもらいたいところですが、本校の教職員数では、一人一人の校務分掌が多く、なかなか割り当てられない状況です。
- 年間計画を作成したので、今後活用を図りながら、更に充実させていきたい。
- 本校は、地域コーディネーターが積極的に活動し、地域とのパイプ役になってくれている成功例と言える。教員は異動があり、引き継ぎを行うとはいえ、前年度のことが十分に生かされるとは限らない。今後もコーディネーターが活躍してくれることを学校は望みたい。そのためにも人材を確保し、新しいコーディネーター育てていく必要があると思う。
- 学校の窓口として地域の方々とのつながりが深まり、児童の教育活動の安定化につながっているとは言え、勤務時間外の活動や地域人材の方の都合優先等の負担を考えると、どの教職員にも担当できる職務とは考えられません。しかし、活動の継続性を認め、年度ごとに新たな活動を取り入れることがないように取り組むことが可能ならば、教職員も地域人材の方々も気負いなく臨めると思います。
- 本校では、長いボランティア活動の中で、コーディネーターが地域連携教員の役割も担ってきたようで、地域連携教員の連絡調整の役割が必要ないくらいになっている。今後は、今現在行われている活動を、全体計画や年間活動として位置づけていくことに努力したいと思う。
- 地域のコーディネーターを任命しているわけではありませんが、地域に関する情報は、PTA 役員や学校評議員、自治会長などから情報を得ています。
- 社会教育主事の有資格者がいなかったり、担任だったりする場合は、どちらにしても副校長が対応するしかないことを考えると、これまでとあまり変わらないと感じた。また、今年度地域連携推進計画を作ったりボランティアを整備したり、とても忙しかったが、「地域連携教員」と言われたからこそ「やらねば」という気持ちになった部分も多い。
- 地域連携教員という肩書は付いたが、教頭として今までやってきたこと、また、現在やっていることは変わらない。社教主事の資格を持っていても、「地域連携教員」は学級担任には大変な仕事である。また、窓口は教頭＝地域連携教員と一本化のほうが良いと思われる。
- 地域連携教員研修に参加して、市町村によって、コーディネーターについての行政の関わり方が異なっていることを知りました。コーディネーターの任命や謝金等、学校任せにするのではなく、行政が積極的に支援してくれるとありがたいです。
- ある程度時間に自由がきかないと、地域連携教員の仕事は難しいと思いました。
- 一般の職員に地域連携教員をまかせた場合、地域との顔つなぎや会議・地域行事への参加等において物理的に無理がある。教頭との連携において業務は成立すると考える。多忙感満載の学校において、大規模校ならまだしも小規模校においては校務分掌割り当て数も多くなるため、教頭の兼務も仕方がないところかと思う。
- 自分の実力不足で、地域連携の目的を教職員に理解させるのが難しい。説明用の資料があったらいただきたい。
- 新たな地域人材をいかに見つけるかが課題である。
- ボランティアの協力は教育活動にとって大変有効である。本校の場合は、教員数が少なく、一人の職員が校務分掌を多く受け持っているため、無担の教頭が係として対応している。実際には渉外的な内容が多く、相手に合わせての交渉や時間の連絡調整など、無担であっても多忙な中での運営は厳しいと感じている。
- 学校と地域が連携した教育活動は、大変意義があると思う。教職員は、長く同一校に勤務することは出来ないことが多いので地域のコーディネーターが必要になってくる。
- 外部の研修会などで、事例を聞かせていただき、参考になっています。

- 地域に地域連携教員という名称が浸透しつつあり、地域の情報収集や外部団体との連絡調整等がスムーズになることがあった。名称については、さらに啓発していただきたい。
- 現在、副校長の立場で地域連携教員を行っているが、仕事の内容としては今まで行ってきた内容とほぼ同じであるので来年度は学校の中心になる担任を地域連携教員に充てそれを支援する立場で進めていきたいと考えている。また、地域連携関係の校務分掌も複数にし、主任が異動しても地域との連携が切れないような組織にしていきたいと考えている。
- 現職教育の時間に地域連携について取り上げることにより、全教員で自校の地域連携について理解したり見直したりすることができた。また、地域のコミュニティの一つの核としての学校のあり方についても考えさせられた。
- 小規模校ならではの特色ある教育活動を推進するにあたって、地域の方の協力は不可欠なので、いろいろと連携を図りながら実施できたことはとてもよかったと思う。
- 今年度は夏休みの作品整理や持久走大会の監視等を、数人の地域の方の協力を得て実施できた。
- 4月に赴任したばかりの学校で、地域のことが分からない状態でのスタートであったので、戸惑うことも多かったが、研修等を通して地域連携教員の仕事を学ぶにつれ、少しずつやりがいも感じられるようになってきた。明るく前向きに地域との信頼関係を築いていこうと思う。
- 今後、効果的な学校教育のためには地域との連携は不可欠であると感じている。地域コーディネーターを配置していただき、どんどん地域の人材を活用していきたい。
- 「地域」といっても、ボランティア等で協力してくださる方は、高齢者が多い。親世代とうまく連携できる方法を模索していく必要があると思う。
- 地域連携教員としてのあり方をもっと研究し、自分の資質を向上させていきたいと思います。
- 地域連携教員を教頭が兼務することで、大変な点もあるが、特に小規模校の場合は、自分が総合調整しやすいというよさを感じることもあった。
- 新たに教育活動に組み込む場合は、学校が必要としている内容と地域の人材等が提供したい内容との違いがないか事前の打ち合わせを十分に行う必要がある。また、学校の教育活動とのバランスを考えて導入しないといけない。そして、内容・時期・ボランティアの方の意図等を十分に考え、慎重に対応しないといけない。本校では、基本的な連絡調整は実施する学年の主任が行うかたちができているため当面、実施した活動の反省をもとに次年度の計画に生かしていく仕事と新たな要望に答えられるように情報の収集活動に重点をおいて取り組みたい。
- 学校教育において地域連携の重要性は増してきていると感じており実践を積み重ねています。しかし、「地域連携教員」の職の指定によって従来以上に課題の解決がなされていくとは思えないように感じます。また、指定によって業務が明確化されましたが一教員が担いきれるものではないように思います。辛口な感想で申し訳ありません。
- コーディネーターが3人もいるが、なかなか忙しい方々でかつ何をしたいか分からない面もあるので、結局自分でやることになる。多くの研修の機会をいただいているが、行こうという声が上がらない。
- 町内一小学校ということで、元々地域と一体の学校で授業支援や諸行事等での協力体制が確立されている。近年の児童数減少により、平成28年度をもって閉校となり近くの小学校に統合となるが、今後も、地域の人材を活用した教育活動ができるよう地域連携教員として取り組んでいきたい。
- 地域連携教員が配置されたことに、新たな取り組みを行う視点でなく、既存の行事や教育活動等を地域連携の視点から整理して取り組むこと（手法を変える等）が大切である。また、準備等の割に効果が小さい等負担が大きく継続できない取り組みは、思い切って止める等の判断が必要である。
- 地域連携教員制度が実施される以前から地域との関わりが深い本地域では、協力者（団体）が既にできあがっており、従来の連携を更に深めつつ、学校教育に生かしていきたいと考える。
- 教育内容の充実に関する連携はできてきていると思います。今後は、学校課題解決に関わる専門機関などとの連携をより図る必要を感じています。
- 地域連携教員が突然設置された「理由」は理解できるが、現実問題として一部の教員（教諭等）には非常に大きな負担となっている。また、研修会等に参加しても理論が先行し、主催者によっては多少無理をしているように感じられる。職務上のメリットがあれば、モチベーションも多少は高まるものと思われる。
- 本校では、「地域連携教員」設置以前から、地域との連携により学習を進めている。年間指導計画の中に位置付けられており、改めて研修等はありません。
- 各種の行事においては、連携教員ではない各担当者が進めていることが多い。
- 地域連携教員の仕事を、教頭の仕事の一部として行っているのが現状であり、非常に多忙感を感じる。各学校に、社会教育主事有資格者を地域連携教員として1名は配置するようにしてほしい。
- 地域連携教員として学校と地域がさらに一つになっていけるようにさらに努力していく必要があると感じている。

- コーディネーターとの連携や地域の人材との連携ができるようになり、行事や学習等で地域連携は深められたことは成果と言える。しかし、地域の高齢化やコーディネーターの変更など今後の課題もあり、活動が難しくなる事が予想される。その点をこれから行政等がバックアップしてくれると良い。
- 地域連携教員の職を担う加配教員を希望します。
- 業務は多忙である。小規模校のため、職員数が少ない上に、社会教育主事が不在である。担任をもって、業務に当たるのは難しいのではないか。
- 本校は、元々地域とのつながりが深い小規模校で、地域連携なくしては行事等が成り立たない部分がある。学校ばかりでなく地域にとっても win-win の関係になるよう、新たな連携の在り方を模索していきたい。
- 地域連携教員は、担任を持たず自由に動ける教員が望ましいと思う。教頭が兼ねてしまうより一般教員に理解してもらい、動いてもらった方が本当の意味での地域連携ができると思う。
- 教頭と地域連携教員を兼ねているので、仕事を進めやすい。
- 地域連携教員の必要性は以前から考えていたが、配置にあたり、担任レベルの連携教員の位置づけなら、教育課程上の授業時間数を削減して、連携に専念できる時間を設定する必要性を感じる。また、連携の形は各学校様々であるが、学校長の考えでかなり各校の進捗状況に温度差が出ると思う。連携教員の研修会を市レベルで開催することや連携の標準化を図る上では、校長会等での研修も必須ではないか。
- まだ 1 年目で、昨年度計画されたものをただこなしているだけになっているので、計画を見直し、学校・地域どちらからも活動しやすく、より充実したものにしていきたい。
- 日常的に地域連携教員が職員室にすることが多いので、地域の方、コーディネーターの方との連絡調整や協力はしやすかったと思う。しかし、担任や教務主任が地域連携教員になると、連絡調整を行う時間の確保をするだけでも難しいと思われる。
- 学校組織を挙げての地域教育の核となる学校作りを推進するためには、教頭、教務主任が地域連携教員になっていたのでは、多忙な校務を掛け持つことになり十分な時間が確保できない。また、学級担任等一般教諭が受け持つのも多忙感を募らせることになり十分な活動は期待できない。地域連携教員の加配をお願いしたい。
- 研修の参加や報告書の作成など、実務が増えました。このアンケートについても同様です。地域連携教員については、市教委からも、アンケート実施の依頼がありましたので、内容も重なる部分が多くあります。アンケートのためのアンケートではなく、調査結果が生かされ、教育行政に反映されることを望みます。
- できれば様々な取組を計画して児童の学びに役立てたいと考えていますが、地域連携に関する業務に携わる時間が取れないことが悩みです。
- これからの子どもの教育は、学校だけでなく地域で社会で行っていくものであることを再認識した。学校が力強い協力者を得て一緒に児童生徒の教育に当たれることは、大変ありがたい。
- 学校における問題点や困っていることについて、地域と共有し、共に解決していこうとする関係づくりが大切であると思う。
- コーディネーター（地域の窓口なる人）をお願いするに当たり、ある程度の財政的な手当があると良いのでは。
- 地域連携教員となり、学校と地域とを結びつけることの大切さを学びました。
- この事業が始まる前までも、教頭や教務主任が中心となって同様な連携活動は行っていたと思う。学校規模によっては、いろいろな分掌業務の他に地域連携も担当なんて学校があるはずで、担任レベルの先生に任せるのはすごく負担ではないかと感じる。全校に社会教育主事の資格をもっている職員がいるわけではない現状はどうなのか。また、資格があるからやれるというものでもないように思う。
- 本地区は、コーディネーターの方が精力的に活動してくださっているとともに、地域の組織が確立されており学校との連携・協力体制が整っているので大変感謝している。
- 地域連携によって現在の学校を「こう変えていこう」というビジョンや理想の姿がまだイメージできていない点を反省しています。
- コーディネーターがいない地域という地域との実践力の違いは大きい。社会教育主事等の地域連携教員の職務に精通及び専任出来る環境がないと、十分な活動の結びつくことが難しい。
- 多様な体験や人との関わりの中で、学習意欲や学力、社会性の向上等、子どもたちの生涯にわたって生きる力が育成されている。
- 教職員も「地域の一員として、地域保護者とともに児童を育てていく」という意識を高めていくことが必要と思われる。
- 地域連携教員になったが、土日の活動に参加することが数多くある。しかし教員特殊業務手当の対象になっていない。そのような制度の確立が望まれる。また、地域連携教員になって他の校務が減るわけではなく、今までの校務

- に地域連携教員の仕事がふえるだけの教員が多くなるように思う。校務分掌上、教頭がよいのか、担任は避けるべきか、生涯学習担当が兼ねるのかなど、校務分掌上の配慮はどうするべきか課題が残る。
- 教頭がやるのではなく、これから学校の核となっていく教員に地域連携教員をお願いしたいが、小学校は担任を持っており、自分の学年がどうしても中心となってしまうので難しい。
- 地域コーディネーターとのかかわりが強くなることで、学校におけるいろいろな活動に積極的に支援をしてもらえることが嬉しい。地域協議会の方々と連携も深まり、学校支援に協力してもらえていることが嬉しい。
- 本校は、以前より地域との連携が密で、地域の人材を豊富に活用した取り組みが行われている。地域連携教員がいなくても、教頭を窓口にもこのような活動は続くと思われる。ただし、教職員が地域の行事に進んで参加することも大切で、地域と学校が持ちつ持たれつの関係であることが大切だと実感している。
- 学校がこれまでに取り組んできた学社連携、外部人材活用等で活用・連携してきた取組を大切にしながら、よりよいものにしていくために、連携教員が中心になって継続・改善していくよう取り組んでいるところである。地域側のコーディネーターの組織作りに苦慮しているところである。
- 本校は全児童 20 数名の小規模校であり、地域連携教員は教頭が兼ねていますが、担任をもっている教員に任せるのは難しいと思いました。
- 学校の適正規模・適正配置等の動きが今後必要になり、小中一貫教育等多様な地域の事情が発生すると思いますので、いろいろな地域の様子が知りたいと思います。
- 研修会で、地域連携の先進校や先進地区の事例を見聞きし、まだまだ本地区は未開であると感じている。少しずつ切り開いていかなければならないと痛感している。
- 本校は近隣の学校と統合し 2 年目である。農村部に位置し、統合前は各校とも昔ながらの「おらが村の学校」という考えが強く、何事にも協力的であった。しかし、統合により保護者の人数が増えたことにより学校任せの保護者も出てきた。各種研修会のお知らせをしても出席者は非常に少ない。地域にしても「自分たちの学校ではない」と話す人もいる。今一度地域の方々に「おらが村の学校」と思ってもらえるような働きかけはどのようなものがありどうしていったらいいのかと悩んでいる。学校だけでなく行政の力が絶対必要であると感じている。
- 本校の組織がもっと大きければ、適切な人材を地域連携教員にすることができる。しかし、組織が小さいため教頭が担当することになった。教職員が多忙すぎるため、地域連携教員としては十分に機能しているとはいえない。
- 大変重要な仕事であるが、教頭や、担任教諭の兼任では、十分な職務遂行は難しい。
- これから地域との連携をさらに進め、地域との協働を行うことが、学校教育にとって、とても重要なこととなる。そのためには、地域（自治会、民生委員、公民館など）と学校が、学校の課題等について話し合う場を設置し、実際に行うことが必要である。
- やむを得ないことだが、教頭が兼務していれば渉外的な部分はスムーズにできるが、本来の業務をこなすだけでも大変な時間と労力を要する。できれば教頭でない別の教員（社教）がやるとよい。（現実には無理だが）地域連携教員に参加を求められる研修会も少なくないので、本校のように職員が 12、3 名しかいない学校では出たくても出られない現実もある。
- 教頭という立場上、外部の方々と接する機会も多く、学校と地域との橋渡しはしやすい。その反面、自分が動いてしまうことで、コミュニティ部や学年職員の関わり、当事者意識が薄くなってしまいう場面もみられた。組織を十分に機能させながらの連携活動推進にはまだまだ勉強が必要だと感じる。（本来、地域連携教員は教頭職でない方が望ましいと伺っているが、その場合は無担であることが望ましく、また、社教主事の有資格者がふさわしいとなると、「地域連携教員」としての教員を加配していただくことが必要になってくるのではないかと思います。）
- 管理職がこの役割をこなすのは、正直辛い。しかし、学級担任に担当させるのは、もっと過酷であると感じている。

■小学校 主幹教諭・教務主任

- 教務主任として、学年全体を見渡したり、時間的なゆとりをもって地域やコーディネーターと連絡を取り合ったりすることができるが、学級を担当している者が地域連携教員となった時に、負担が増えないかと感じることがある。
- 地域連携の教育にチームとして取り組んでいく体制づくりが必須だと思うとともに管理職ではない地域密着型の息の長い（長く在籍できる）教員がチームを引き継いでいく体制により持続性が出てくる。
- 学級担任が地域連携教員を務めるのは、打合せや情報交換の時間等を考えると厳しい。社会教育主事の有資格者や教頭・教務主任以外の学級担任ではない者が担当できれば一番良いのだが、規模が小さい学校では難しい。
- 児童に生きる力をつけるために地域の力が必要ならば、積極的に活動を進めていきたいと思っています。それが地域の人々の活躍の場になれば、なおよいことだと考えています。
- 地域の素材をこれからも研究し、コーディネーターと意見の交流を図りながら、お互いに楽しく活動していけたらすばらしいと思う。

- 地域連携教員となって、以前より地域資源の活用の意識が高まった。
- 地域連携教員になって、地域連携の重要さを肌で感じる事ができた。コーディネーターがいない本地区で、より効果的な連携や情報の収集を図っていきたい。
- さくら市では、すでに地域連携を推進するための体制が整っており、これまで係名を「地域連携教員」と変えるだけでよかった。また、コーディネーターは3年以上の経験があり、教務主任が地域連携教員になるなど、本校は大変恵まれた環境で実践できている。しかし、体制が整えられていない市町や学校もたくさんあると聞く。全公立学校にコーディネーターを置けるような体制作りを県としても進めてほしい。地域連携教員の横のつながりをもてるような、ネット上での場があれば紹介してほしい。無ければ、県で用意していただきたい。
- もともと地域と連携した活動は、たくさん行われていました。地域連携教員としては、取組のPDCAサイクルを整え、特に記録と評価を大切に、それらの活動をさらに効率よく、効果的に推進できるように機能したいです。
- 地域連携教員の研修で、情報交換ができる場があり大変勉強になりました。
- 地域と連携し、地域の教育力を生かした活動は、特色ある教育活動や学校づくりに今後ますます欠かせないものとなると思う。
- 新任ということで、年度当初は手探りの状態からスタートしたが、業務を進めていくに従って、地域の方とのつながりが徐々に深まっていくのを感じ、徐々に業務が円滑に進められるようになりつつある。しかしながら、コーディネーターの方がいれば、さらに効果的に連携ができるのではないかなと思う。
- 家庭や地域の教育力を高める取り組みを今以上に推進していく必要がある。「地域の子どもをみんなで育てよう運動」などの取組を小学校区単位で毎年開催できたらうれしい。
- この制度は、校務分掌に地域連携教員を位置づけたものですが、中心となる地域連携教員にある程度の時間がないと負担感を大きく感じます。結果的に意欲的に活動できず活動が停滞しがちになります。現実的には、難しいことはわかりますが、教員を増やすまたは、各市町村教委に社会教育主事をさらに配置するなどして負担感を感じないようにすることが大切だと思います。
- 地域の方々と話す機会が今までより増えたことは、大変よかった。自分自身は教務主任という立場であり、時間的に余裕があったのでできたことも多い。また、本校勤務9年目で地域のこともある程度わかっていたことも大きい。学級担任をしながらの地域連携教員は、本校では難しいと感じている。
- 今後も地域連携活動を組織的・効率的・効果的に進めていきたい。
- 昨年度は、学級担任として地域連携教員の役割を担っていたが、なかなか思うように仕事を進めることができなかった。今年度は、教務主任としての関わりだったが、昨年度に比べるとスムーズに進めることができたように感じる。
- 地域の実態が違うのとそれぞれの学校での地域連携教員のスタイルがあると思うので、その学校にあったスタイルで実施できればよいと思う。教員の立場でも違いがあるので、自分らしさを出して、一人で責任を感じず、無理せずチーム（仲間）で学校と地域をつないでいけばよいと考えている。
- 地域連携に関する諸計画を整理統合しているところなので、業務運営を効率的に進められていない。
- 地域と学校の協力体制はよくとれている地域で、交流活動も充実している。教育効果を考えて、随時検討改善を加えるようにしている。
- 連携の大切さ、難しさを感じながらでしたが、地域の方々とふれあう楽しい経験をさせていただき地域のことについて知ったりするいい機会となりました。
- 地域連携は、現代の子どもたちに「生きる力」をつけていくために、大変重要なことだと思います。そういった意味で、「さらに推進していけるとよい。」と思っていますが、やはり、他の業務と両立しながら行っていくのは、負担も大きいと思います。地域の方とつながっていく楽しさや、実施後の効果を感じながら、それをエネルギーに変えて頑張っています。
- 1年目なので分からないことが多かった。十分機能したとは言えない。少しずつ情報を集めいろいろな授業アイデアをストックし自校の計画を充実させていきたい。
- 担任の先生が地域連携教員である場合は負担が大きいと思います。校務分掌の軽減等の配慮が必要だと思います。コーディネーターとなる人への謝礼、事務用品、茶菓子等の予算が少しでもいいのでほしいと感じています。
- 開かれた学校づくりを推進するために、地域連携教員は地域と学校をつなぐ大事な役割があることを改めて感じます。これまでの取組を今後引き継げるようきちんと記録を残すとともに、新たな人材を発掘していくことが大切だと考えています。
- 本校は社会教育主事が4名いるものの、その資格が十分に生かされない状況がある。これは、他の校務もあり、校務以外の仕事となってしまうため、本来の業務に支障のないように配慮して協力を得ることが必要になっている。学習の支援が学校には必要性があるが、地域住民が学習の支援としてボランティア活動をするには、保護者の

理解やボランティアの人材確保、支援についての綿密な計画が必要であると感じている。

- 大変やりがいのある職務です。今後も、学校教育目標の具現化に向けて、地域連携を推進していきたいと思います。
- 地域と学校のつながりが強く、共に様々な行事を行っている学校では設置する効果があるが、つながりが浅く、行事がない学校では新たなものを作り出すのは非常に難しい。
- 今後、地域の教育力を児童の教育活動の中に取り組み、児童の成長につなげていくことができるように配慮していく。
- 一番の副産物は、地域の子育て中の女性に活躍の場を与えられたことである。出産前は、社会でばりばり働いていたのに、出産後はどうしても家に引きこもりがちになりフラストレーションを抱えがちになる。しかし、祖父母の協力も得て、学校に時々出かけ、学校や児童に必要とされていることを感じ、生き生きとボランティア活動に参加してくださっている。これは思いがけない成果であった。
- 新任地域連携教員として取り組んでまいりましたが、実践としては不十分であり、さらに具体的な取組を積み重ねていく必要性を実感しています。地域の力を教育活動に取り入れる効果を考えながら計画的に実践することや日常的に学校と地域双方ができる限り負担感なく取り組めることを念頭に置き、役割を果たしていければと思います。
- 地域の人に顔を覚えてもらい、声をかけて頂く事が多くなった。地域の人とコミュニケーションがとりやすくなったことが一番の成果である。
- 社会教育主事の活躍の場として、地域連携教員が設置されたので、社会教育主事がいるなら、その方を優先的に地域連携教員になってもらいたい。
- 地域連携教員が配置されたことで、学校全体のニーズをつかむことができ、よりよい学習活動ができるようボランティアの要請が図られるようになった。
- クラス担任との兼務では活動が十分にできない。
- 今年度は、新しい参画行事の企画運営もあり、地域コーディネーターをはじめ、たくさんの方々と意見交換したり、一緒に行事運営ができたり、とても大変なことが多かった時期がありましたが、新しい発見もたくさんあり、経験できて良かったと感じています。
- 赴任した一年目だったので、地域を知ることが精一杯で十分な仕事ができず申し訳なかった。
- 地域連携の重要性が今後益々大切になることから、地域連携教員としての使命感を自覚するとともに、若手教員への啓発などもしていきたいと思う。
- 他業務との兼ね合いや教頭との業務連携を調整していきたいと思う。
- 児童がよりよい成長をしていくために有効な地域連携を進めることができればと思います。
- 地域を知る努力をもっとしなければと思っています。
- 学校からの情報発信（要望など）を地域は待っている。地域に広く目を向け、地域の声を聞きながら、学校からも地域に出向いていくことが大切だと思う。
- 異動1年目や学級担任としての業務の困難さが、研修会等でも一番の話題でした。
- 地域密着型の学校なので、互いに協力し合い、充実した活動ができていると思う。
- 今まで生涯学習の中で行ってきたことと重なる部分が多いので、生涯学習担当と連携しておこなっていくのがよいと思います。社教主事の資格を持っている方がなった方がよいのではと思います。
- 手探り状態の一年でした。まだまだ、何をどうすれば良いのか…といった状態です。これからも、いろいろな情報を得て、自分がすべきことをやっていこうと考えています。（考えるだけでなく、実行しなければいけません）
- 地域との関わりかたについて、副校長と運動した活動ができるようにしていかなければならないと感じています。
- まだ職務に対する理解が不十分で、計画にあることを何とかやっている状態である。よりよい計画を立て、改善を図っていきたい。
- 私は、現在の勤務校に延べ11年勤務している。地域の様子を把握していたり、地域のキーパーソンと顔見知りだったりすることから、地域と連絡・連携をとりやすい。しかし、赴任したばかりの教員や担任をもつ教員が、地域連携教員になると多忙感が増してしまう可能性がある。一人に任せるだけでなく、各学校において組織的な地域連携が重要になると思う。市や地区ごとに地域連携教員以外の教員も参加できる研修があるとよいと思います。
- コーディネーターだけでなく、長寿会・社会福祉協議会・育成会・自治会長などいろいろな方に顔と名前を覚えていただき、連携をとりやすくなった感じがする。地域の方が児童とのふれあいを楽しみにしてくれたり、児童の活動が意欲的になったりしたことがよかった。
- 地域連携は、学校教育の課題解決に大きく役立つと思うので、人・もの・予算をつけてほしい。

- 人と人をつなぐこともですが、地域の文化や歴史に興味関心がないと、と思います。地域学習の授業にもっと取り組みたいと思います。
- 社会教育主事有資格者というだけの立場では、校内での役割等が明確ではなかったが、地域連携教員が新設されたことで、校務分掌上の立場ややるべきことが明確になり、たいへん活動しやすくなった。
- 地域連携教員の活動が定着し、今後、とちぎの教育がさらに充実することを期待します。
- 地域連携教員として各種研修への参加や実践を通して、その重要性が分かってきました。他地域や異校種の地域連携を知ることもとても大切だと思いました。
- 学習支援をしてくださる組織ができあがっているので、「地域連携教員となって」を特に感じていない。
- コーディネーターがいないと負担の大きい仕事になりやすい。コーディネーターとの連携・協力関係が必須で、効果的効率的な活動につながる。

■小学校 教諭(担任)

- 社会教育主事の養成にもっと力を入れてほしい。教員養成課程の段階で社会教育主事への啓発をやってほしい。
- 学年主任・担任の立場では、自由に動くことができる時間が限られているため、学校全体の地域連携を推進することは難しいと感じている。
- 学級担任が地域連携教員となることは実質無理があると感じます。良い勉強にはなっていると思いますが、学級経営、授業、校務等を行う時間が多く、日中外部人材と関わることや連絡を取り合うことは不可能です。地域連携教員としての仕事はできていないのが実情です。また、行政からの支援や指導もないに等しいので、コーディネーターをどのように設置したらよいかも分かりませんし、設置した後の対応も分かりません。勉強不足かも知れませんが、また、効果的な地域連携活動ができているとは言えない現状を感じます。
- 自分自身が業務の理解不足もあり、十分役割を果たせず申し訳ないと感じている。
- 今後も研修を深めていきたいと思う。
- 異動してきてすぐになったため、地域の様子や組織、方法など分からないままやっているの、不安が大きい。また、学校規模も大きい、他の学年の様子もよくわからないことが多い。
- 学校と地域が連携することは、とても意義のあることだと思うので、人数を増やして力を入れるべきと考える。
- 学級担任もしているため、各学年や学校としての要望を吸い上げ、どのような形でそれを具現化していくか考える余裕がなかった。地域連携教員に時間や職務の余裕のようなものがあると活動できるのではないかとも思う。年々、社会教育主事の資格を持つ人材は増えていると思うが学校に戻ると、学校内の仕事に押しつぶされ、資格を十二分に発揮できていないのではないかとも思える。
- 地域連携教員の活動がうまくいくには、学校教育関係の研修（管理職）に、地域連携教員の研修を開催する。
- 「ボランティアの世代交代を少しずつおこなえたら。」と地域コーディネーターの方とよく話しています。学年の保護者にも呼びかけるようにしていますが、若い世代の方は仕事を持っている人が多いため、なかなかうまくいきません。この課題を何とか改善したいです。
- 教員が本当に必要だと感じている場面に、学校支援ボランティアの力を活用することができれば、教育効果は大いに高まるとともに、教員の地域連携に対する理解も深まると考える。そのためには、教員のニーズを把握すること、それをタイミングよく実現すること、教員の連携に関わる負担を減らすことが大切だと考える。
- 行政主導でコーディネーターを育成してほしい。学校でコーディネーターを探すのは困難。
- 学級担任をもっていると、地域連携教員としての十分な役目を果たすことは難しいと思う。
- 地域連携により、学校における様々な問題解決とともに、地域の活性化ができるのでさらに推進していきたいです。
- 担任として、地域連携に関する仕事をするためには、教頭や教務主任の協力が必要である。
- 地域連携教員として働くことができ、地域とのつながりがさらに深まるとともに自分の教育観に変化が生じた。そして、より良い指導や支援ができるようになり、視野が広がったと思う。さらに次年度の研修や実践をどう深化させていくかなどの課題も見えてきて、意欲向上につながっている。
- 正直他の公務が優先で、地域連携教員としての仕事は後回しになっているのが現状です。地域連携を進めることの効果や大切さは理解しているつもりだが、なかなか時間の確保が難しいと感じています。
- 地域連携教員として、すこしでも外部団体やボランティアとの連絡調整が取りやすいように、リストの洗い出しや使いやすいリストの作成に協力したいと思います。

- 社会教育主事の資格あるいは研修は必要であるが、まずシステム作り、コーディネーターの養成をお願いしたい。教員は異動により変わるが、地域に根付く人材は変わらない。まず地域人材の育成が必要である。資格を持った人数がいるだけでなく、他の県で地域連携が行われている実践例をもとに考えてほしい。
- 学校の中に、地域の方が入ってくることは、子供たちも多くの人の中で育まれて育つことができますし、支援を受けることもできるので、とてもよいことかと思えます。
- 学校と地域が連携することの重要性を認識し、地域連携教員としての役割をしっかりと果たさなければならないと感じています。
- 円滑な学校経営が運営されるための一助となるよう、取組を充実させていくことが重要であると思う。
- 「地域連携教員になった際の効果」については、栃木市のとちぎ未来アシストネットの学校コーディネーターを担当したときと同様です。「地域連携教員」は学校コーディネーターと比べて質量共に大きく拡大しています。担任の立場では地域連携教員に求められる全てを把握することは無理です。本校は分担されていて大変助かっています。学校コーディネーターや地域連携教員が学校全体の担当として業務を行うことはある程度可能ですが、地域コーディネーターは地域の代表ではありません。「地域」は大変多様で広いものです。文科省のモデルでは地域コーディネーターが地域の代表・窓口のような形になっていますが、仮に学校で学校支援ボランティアを探してほしいと要請しても全てを網羅することは難しいです。地域コーディネーターに過剰な負担をかけないような配慮も必要です。実際に過去3年間関わってきて文科省のモデル図のあり方は現実には難しいのではと思います。
- 本校では、地域連携に関する活動の連絡窓口や調整は、学年主任が中心となって行い、スムーズに進められている。また、渉外関係は、教頭先生が中心となって行っているため、地域連携教員が中心となる場合は少ない。
- コーディネーターが地域（市）に一人しかいないため、増やしていただくか、地域ごとに確保しないと厳しい。
- 学級担任なのでなかなか時間が取れず、実際にどんな活動ができるのかを模索中です。
- 今年度、地域連携教員になって、もっと学校と地域を結んでいかなければいけないと思っています。まだまだ、宣伝不足なので、来年度に向けてさらに職員の意識を高めていきたいと思っています。
- 地域連携全体計画・年間活動計画の作成・見直しの立ち上げの1年であった。地域連携の基となるのは、人と人との信頼関係だと思う。積極的に学校の外に出ようと思っはいるのだが、なかなか実行しないまま、1年がたってしまった。
- 地域連携教員という役割は、とてもやりがいのあるものだと感じていますが、自分自身に余裕がないときには、活動が十分でない時があるのが残念です。本校のように小規模校においては、地域に学び、地域と学ぶことができることは、教育活動の幅が広がるので、とてもよいことだと思います。
- 仕事の進め方がはっきり分からない。また、担任や複数の校務分掌を兼務しながらの遂行は、少々困難があるように感じる。
- 地域連携教員としての活動はまだ不十分だと思うが、本校の教育活動における地域連携は、職員の協力体制により十分にとれていると思う。今後も職員、地域と協力しながら、より良い活動を充実させたい。
- 担任と地域連携教員を兼ねていると、多忙で連絡調整の仕事が十分できないときがあると感じています。他の先生方との役割分担をしたり、協力していただいたりすることが大切だと思います。
- とにかく忙しくてなかなか地域連携の仕事ができていないので、今後工夫をしながら仕事を進めていきたい。
- 地域連携に関わる業務について、教頭、主幹教諭も携わってくださり、担任をもってクラスの指導にあたっている自分としては、とてもありがたい。
- 市に聞けば分かることなのかもしれませんが、コーディネーターの存在は不明です。もしいるのであれば、毎年年度当初に顔合わせなどが出来るように計画して欲しいと思います。受け身のようなのですが。
- 名前ばかりで、何も取り組んでいないのが申し訳ない。
- もともと地域人材の活用が活発な地域のため、地域連携教員としての立場がなくても、地域との連携が図られていると思います。より地域連携を進めていくためには、無担が地域連携教員をやり、窓口として連携を進めていけば、教育活動でもっと地域との連携が図られていくのではないかと思います。
- 地域連携教員となり、学校に関わる様々な人と顔見知りになることができた。その結果、地域の特色と学校が地域の中で、どのような位置づけなのかが分かってきた。以前よりもボランティアが校内で活動する機会が増えたので、他の教員のボランティアへの考え方などが変わってきている。そういう、教員の意識改革がとても重要だと感じている。
- 研修に参加し、地域連携教員について今後勉強していきたいと思っています。また、地域連携教員同士の活動や悩みについて話せる場があればいいと思います。
- 本アンケートについては、申し訳ない気持ちで解答しています。小規模校の実情もあり、なかなか地域連携教員の

仕事にまで手が回りません。やるべきことは多かったと考えていますが、上記のような実情で現在に至っています。内容的には本校として取り組んでいないわけではなく、実務的には対外的なものが多いため、副校長先生が多くを背負って行っているところです。

- 他の業務が多忙なため、地域連携に関する業務の時間がなかなかとれない状況である。連絡調整等は担任が行うのは難しいと感じている。
- 今後はますます地域の教育力を生かすためにも連携が大切になるので、学校での取組をさらに地域の方々に知ってもらい参加を呼びかけたり、既存のボランティア活動をさらに活性化させたり、他の先生方と協力しながら尽力していきたい。
- 地域連携教員としてやりがいを感じつつも、他の職務に忙殺されてできることがもっとあるのではと感じる毎日です。ただ、2年目となり学校教育ボランティアの活動内容も少しずつ充実してきました。また、地域連携教員対象の研修に参加できることで、視野が広がり大変ありがたく感じています。
- 担任として、地域連携教員の仕事を全うできず、申し訳なく感じています。
- 新年度の計画立案に十分に本年度の反省を生かし、事業の充実に努めたい。
- 今まで上手く動いていたものが、地域連携教員が入ってかえってトラブルが起きている。間に入る人が増えたことにより、連絡調整に時間がかかるようになり、利用するのを止めてしまう（計画が間に合わなくなる）ことも起きている。地域連携教員は紹介や記録の収拾程度にとどめ、連絡調整は直接担任や係が行った方がよい。
- 地域連携教員の研修でよく話題になるのは、担任を持っているとボランティアさんとの対応の時間がうまく取れなくて、担任業務に差支える場合があるということです。地域連携教員を選ぶ際に考慮していただきたいです。
- 今年初めてなので、まだ自分の役割を把握できておらず、十分な活動ができていない。ボランティアの方が学校に入るということで、活動の幅が広がったり、安全面の確保ができたりとメリットは大きい。反面、先生方が負担に感じていることもあるので、この課題を解決するのは地域連携教員の仕事なのかなとも思う。
- 地域連携に対する理解を深め、地域連携が進むよう努力したいです。
- これからも地域連携に関する最新情報を提供していただけると幸いです。
- 自分が直接繋がなくても各学年で対応している状況で、必要性があまり感じられません。
- 今年、初めて地域連携教員になって、忙しい中、自分なりに仕事内容を理解し仕事に携わることができた。学校と地域を結び付けるうえでの重要性を更に認識し取り組んでいきたい。
- 地域連携教員として、なかなか活動できていないのが現状です。何から、取りかかっていたらよいか、考えて実践できるようにしていきたいです。
- 担任をしながら、地域連携教員をすることの難しさを感じています。できれば、顔つなぎして、つながりを作っていきたいと思いましたが、学校に来ていただいた方に顔を出したり、お話を伺ったりすることは時間的に厳しいものがありました。
- 今年度から地域連携教員となり、業務内容等がよく分からないままスタートした。しかし、さまざまな研修に参加させていただき、今後の地域連携の必要性を強く感じるようになった。今後、地域連携教員としての責務をしっかりと果たし、コーディネーターと協力して活動を充実させていくことで、子どもたちへのよりよい教育活動となるよう努力していきたい。
- 地域の方々とお会いする機会が増えたので、学校の情報や地域の情報交換が十分できるようになりました。社会教育主事講習会で学んだ地域との連携の大切さを改めて感じました。これからも積極的に地域の方と連携していきたいと思います。
- 今後も地域連携教員として研修を重ねていきたいと思います。
- 担任を持ちながらの地域連携に関する業務は難しい。
- 様々な研修等を通して、地域連携の重要性を実感していますが、思うように進めることができない現状です。少しずつでもできることに取り組んでいきたいと思います。
- 地域連携教員が設置された意義や重要性は理解しているつもりだが、学級担任との両立は難しい。
- 2年目になりますが、まだまだ地域連携教員という仕事を完全に理解していないなど、自己の研修が足りないと思います。まだ計画や年間の見通しが分からないところもあり、マニュアルを参考にしながら行っている状況です。
- 研修等や横のつながりを通し、いろいろな実践校の連携教員や管理職の先生方の意見や考えを聞き、自分の勤務校にあった実践をどんどんしていきたいと感じています。いろいろな変化に対応し、地域と学校のよりよい関係をつくっていく手伝いをしたいと考えます。

■小学校 教諭(担任外)・その他(講師等)

- 異動1年目で地域のことがよく分からず地域連携教員としてどのように動いていいのかわからない状況です。
- 本校にはしっかりとしたボランティアコーディネーターが以前からいて、その方との連絡調整役をしている。それ以外の活動については検討中である。
- 本年度本校に異動してきて、初めて地域連携教員となりいまだに地域のことにってはわからないことが多い。活動内容や連絡先などはファイルで引継がれているので担当が変わっても対応できるが、直接会って知り合うことでより深く関わられるようになってくると思う。
- 地域の中の学校という目で見える機会が多くなった。また、外部ボランティアの方々に連絡を取ったり新たな人材を見つけていったりする課程で地域の方々の温かさ等を感じることができた。また、電話だけでなく実際にお目にかかり話すことの効果なども感じることもできた。
- 地域のコーディネーターがいないので、地域連携教員としての具体的な活動がやりづらい状況である。
- 地域連携教員という立場を、学校の中でどう位置づけていくのかは、学校規模、職員及び校務分掌の構成、市町の実情によりかなり違うのではないと思う。率先して学校と地域を結びつける役割を担うことが可能な学校、情報の収集及び提供の役割に限定される学校、教委委員会に地域連携の窓口があり、そこを頼りに地域連携の体制が成立している学校など、多様な位置づけについて考査する必要があると思う。
- まだ地域連携指導教員としての仕事が飲み込めておらず、少しずつ学びながら、ほかの先生方の支援を仰ぎつつ、できることから取り組んでいきたいと思えます。
- 地域連携による活動のねらいに、キャリア教育の育成目標(基礎的・汎用的能力)をリンクさせると、意図的・系統的になると考えるが、キャリア教育そのものの理解が進んでおらず、思うように推進できない。
- 「地域連携教員」という肩書きを、機会ある度に活用してきましたが、まだ地域に浸透できていません。他校では、教頭先生が兼務されることが多く、一般教員では活動の幅が狭くなってしまいがちであることに課題を感じています。2年目の活動になり、やっと地域の方に顔を覚えていただけってきた実感があります。積極的・地域に出向いて、人とつながる機会がもてるよう、努力を重ねていきたいと思えます。
- 地域を理解し、地域との連携を図り支援をいただく上でとてもやりがいがある。毎月の職員会議時に、「地域連携教員より」などを紹介し、地域との連携の大切さを職員に啓発し研修を続けている。また、「外部人材・地域教材活用の記録」の作成を進んで行う職員も増えつつあり、指導の成果や今後の課題などを要点を絞って書くことができ、次への活動に生かすよう取り組んでいる。先生方は、地域連携の大切さを実感し取り組み子供たちの教育効果を高めている。
- 地域人材の発掘(修繕・学習支援ボランティアだけでなく、行政も含め児童と多様な手段で関わる人材)のために、今以上の学校から地域への積極的な情報発信が必要だと思われる。また、そのような人材の情報を校内で共有することが地域との連携を密にする1つの手段と考えます。
- 地域連携教員についての捉え方が、教職員間で異なります。また、地域連携教員の業務内容は、これまで他の校務分掌の教員が分けて行っていたものであり、改めて自分が担当することはありません。地域との連携はしていないのではなく、ケースに応じて学年、教頭等が窓口になっている流れが続いており、学校での位置づけは曖昧です。自分に意識があっても校内体制がそうならないため、実務が伴わない現状をご容赦いただければと思います。
- 今後、年度内に研修があるので、さらに理解や知識を深め実践していきたい(来年度のためにも)
- 地域の人々との繋がりを多くもつようにするとともに深くするように心がけたい。まだまだ、やることがたくさんあるので少しずつこなしていきたい。

■中学校 教頭・主幹教諭・教務主任

- 地域連携教員の必要性和重要性を感じますが、地域との連携の必要性和重要性を全校体制で理解し、協力しているという組織・体制を醸成していくことが大切であると思えます。
- 壬生町は教育委員会が積極的にリーダーシップをとってくれるので地域と学校の交流が盛んに行われている。ありがたい。
- 地域コーディネーターや河内中 魅力ある学校づくり地域協議会などとの連携を密にし、有効活用して、学校や地域にとってプラスになることを「無理はしすぎずに、できる範囲内」で少しずつ具体的な実践にうつしていきたい。
- 教育改革の方向性として、地域連携教員の必要性等については十分に理解できるが、多忙感を感じている連携教員は多いと思う。人的な方策が必要なのではないだろうか。
- 外部(お世話になる方々)との連絡調整が何度も必要になる場合があるので、学年等に属さずフリーに動ける立場の教員が地域連携教員には向いていると思う。また、地域のことを理解していないと連携は難しい。赴任1年目の教員などはつらいかもしれない。

- 適任の地域コーディネーターを学校で見つけるのは難しく、選出から地域の行政機関等の主体的関わりがほしい。市町や地域による行政機関等の連携体制、支援体制の格差が、学校の感じる負担感の温度差になっていると思う。
- 地域連携教員は、学校の対外的な窓口である教頭が行った方が連絡・調整がスムーズにできる。
- 教頭という立場であるため地域連携教員という意識が低かったように思う。
- 教頭という立場での関わりなので、地域とのおつきあいは大切な業務の一つであるが、すでに地域と関わる様々な行事が実施されている。その中でそれらをどう整理し、学校経営に生かせるような地域との関わりを再構築しているか、地域コーディネーターをどう生かしていけるかなど、難しさを感じる。
- 地域連携教員の条件について、社会教育主事有資格者であること、または教頭でもよいこと等あるが、そこに年齢差があり、協議等では違和感をもつこともある。現在の他の分掌も教頭が音頭をとって、教諭が企画や連絡調整、実践していることも多い。それではダメなのだろうか。様々な考え方があり悩むところである。
- 全ての学校に社会教育主事有資格者がいるわけではないので、重要性は理解できても、有資格者でない場合は細かな部分への対応が難しい。
- 地域をよく知る教員、特に何年もその学校で勤めていて地域をよく知る教員が、地域連携教員として業務遂行することがこの分掌では、有効かと思えます。
- 今年度の4月、本校に初めて赴任した。本地区での勤務も初めてであったので、地域や住民との交流を積極的に行う必要があると強く感じている。他の業務もあることから、外出しての交渉や交流を行うには厳しい時期もあった。今後も、無理をせずに、生徒や教職員、地域のためになることを進めていきたい。
- 地域の教育資源を効果的に活用した「本校(本地域)ならでは」のより充実した教育活動の実現目指して、学校のニーズを踏まえながら、教職員や地域コーディネーターとの連携・協力をさらに推進する必要がある。
- 教頭職との兼務に難しさを感じる。
- まだまだやれることがあると思うので、一步一步、前進していきたい。
- やりがいのある立場だが、教頭としての業務もあり十分な活動ができないことが残念である。
- 28年度に向けて、「地域連携推進計画」を作成中です。年度当初に全職員に示し、来年度の地域連携に全職員で取り組めるようにしたいと思っています。
- 従前とあまり変わらないように思える。
- 研修会を通じて、地域との連携について深く考える場面を得られたことは参考になりました。
- 学校教育の充実をさらに図っていくためには、地域との連携・協働は必要不可欠である。そのためにも、学校と地域の方々との話合いの場を定期的に設定し、自由に意見交換や情報の共有を行っていく必要がある。
- 地域連携教員として何をしたらよいか試行錯誤しているところです。もっと積極的に地域と連携しての活動を行っていききたいところですが、学校としての行事等も多々あり、思うように入れられない現実があります。また、地域のコーディネーターの方について自分がよく理解できていないため、連携が深まっていないところもあるので、今後まず地域のコーディネーターとの連携を深めていきたいと考えています。
- 地域連携の必要性を感じますが、現在の多忙な学校教育の中に新たに活動を入れることは困難であることを感じます。地域連携教員がリーダーシップを発揮し、連携を図り、単年ではなく継続的に続くように組織をつくるのが大切であると思えます。
- 元々地域との連携ができていた地域なので、「今更なぜ地域連携？」という感じだった。今までの行事も、地域連携教員としてやっているのではなく、教務としてやっているだけである。
- 中学校でも、自分が思っていたよりも地域の人材を活用していたことがわかった。各行事を担当者が地域人材等と連絡を取り合って実施している現在の形式に特に問題は無い。他の職員も、お互いの多忙さを配慮してか、地域連携教員が外部とのやり取りをすべきとは考えていないようである。これから新しい行事等を行う際は地域連携教員が最初の窓口になることが必要なことであると思う。
- 本校では、これまでも地域連携の取り組みがなされてきているので、新たな取組を増やすよりも、これまでのものを組織的・有機的に整理し、より意味のある充実したものになるようにしていきたい。
- 今まで行ってきた活動を地域連携の視点から見るができるようになった。ただ、連携を進めていくには、改善の余地が多くあるのが本校の現状である。

■中学校 教諭(担任)

- 地域連携教員として携わるようになると、地域の教育力の大きさを改めて感じた。本校は地域の協力をたくさん得ることができ学校と地域に近い存在である。さらに、よい活動になるように地域連携教員として働きかけをしたい。

- 地域と連携して学校行事など、さらに盛り上げることができています。今後はさらに、本校らしい取り組みをしていきたいと考えております。
- 連携教員の校務分掌が位置づけされる前から地域との連携を重ねてきており、スムーズな行事の運営がされているのであえて意見や感想はありません。
- 地域連携教員になって、多くの研修会に参加させていただいて勉強になりました。研修で行政職の方の意見も聞くことができ参考になりました。これからは、教員、公務員だけでなく一般企業の方と知り合う機会をどこかに求め、人脈を広げていきたいと考えています。
- 今年は、新しいことを始めなくてはと誤解していましたが、来年度は今ある学校行事や生活の中に地域の協力を得られるように準備をしていきたい。
- 担任、部活動顧問をやっていると、多忙感があります。研修だけではなく、これからコミュニティスクールを発足していくにあたり、十分時間を費やせるかが不安です。
- まだ、十分な取組ができていないので、先進的な取組を参考にしながら、本校として組織的な活動ができるよう整備していきたいと思います。
- 労力に見合うだけの効果があるとは思えません。
- なかなか思うように活動できていないが、管理職の先生方に励ましていただき、地域との連携を進めている。地域連携は、人と人の結びつきなので、ある程度関係づくりや、教員、地域の方、関係機関との情報交換の時間が必要である。授業時数、校務分掌等の問題を克服することで取り組みは大きく変わると思われる。
- 地域連携教員という立場ではありますが、なかなかうまく運営できていないことを反省しています。学校支援ボランティアの方々の協力が得られやすい環境作りや学校が地域に情報を発信できるよう、積極的に働きかけなければならないと感じています。
- 地域連携は重要であることは自分としてはとても認識している。しかし、学校の業務が多忙のために、そこまで回らないことや、地域とのコミュニケーションをとる時間もない。そのために、地域連携の仕事がなかなかできないというジレンマがある。また、地域連携教員の立場も確立していないために、手探り状態である。
- 様々な方々の力の大きさ、ありがたさを感じます。
- 計画立案、他の職員との連絡調整、地域の方達との対話など、やりたいことはたくさんあったのですが、毎日の多忙により、十分な働きができなかったことをとても申し訳なく思っています。今年度と次年度に向けて、地域や職員との対話、聞き取りを充実させ、再来年度あたりには一つの明確な計画立案、組織の役割の明確化、実践を進めていきたいと考えています。
- 地域の方や保護者、PTA 役員の方々などと良く話をするようになり、学校がどのように見られているのか、学校が何を求められているのか意識するようになった。地域や保護者の支えや理解、協力、支援があって、学校での教育が成り立っていると感じる。学校・家庭・地域がよりお互いの立場や意見、願いや悩みを理解し合い、生徒たちをみんなで見守り、育てていけたらいいと思う。
- どういうときに、どう動けば良いのか迷っていることが多かったです。
- 普段から学校とつながることの多い生涯学習施設や公民館、社会福祉協議会等の関係機関に、学校に「地域連携教員」が配置され組織的に地域連携教育活動を進めていくことになったことを、もっとアピールするとよいかと思う。
- 本校では、以前から地域との連携が円滑に進められており、校務分掌における各担当者において教育活動が効率的に展開されている。また、中学校現場では、学級担任をしながら様々な校務分掌を抱えている状況において、地域連携教員の職責を十分に果たすことが困難である。
- 初年度ということもあり、何をしたいのかわからないまま時間が過ぎた。研修等で他校の地域連携教員と話す機会もあったが、みんな手探りで活動をしている様子が聞けた。各校での取り組みやノウハウを共有していくことで、それぞれの学校で地域との連携が活発になっていくのではないかと感じた。
- 担任として学校全体に関わる地域連携教員をすることは難しい。
- ボランティアの方とのコミュニケーションの取り方、負担にならずに続けられる活動のあり方など、まだまだ模索中です。
- 教頭や先生方の協力を得ることができて、大変有難いと思っている。
- 地域連携教員は「学校の顔」、という認識を強くもつようになった。学区内の自治会長さんと連絡を取ることで、学校の窓口にもなることができた。また、さまざまな研修に参加すると、実践例報告はほとんどが「小学校」であり、中学校の実践例が乏しい。そのため、具体的にどのように地域人材の協力を得れば良いのか分からないところがある。そのため今年度は、「中学生が地域に出る」と言うことで、公民館の文化祭に本校の合唱部と吹奏楽部の発表を取り入れていただいた。これからの地域連携教員研修では、中学校の実践例を多く知らせていただくと助かります。もし難しければ、分科会などでの話し合いの場があると良いと思います。今年度は、手探りの状態で地

域連携教員として動いてきましたが、来年度は今年度よりも、さらに活発に学校と地域の結びつきを図れるように、計画的に実践していきたいと考えています。

- 小規模校で学級担任もしているので、地域連携教員の他、多くの校務分掌もあるのが現状です。地域連携教員として実際に活動することは充実感もありますが、なかなか時間がとれないと感じています。
- 勤務時間内に地域連携業務に関する時間の確保ができない。
- もっと力を注ぎたい気持ちはあるが、他の業務に時間がかかってしまう。
- 「担任だから地域連携は実質的に動けない」という考えをもつ教職員も多い気がします。本当に地域連携を理解していればそのような考えには至らないと考えます。保護者や地域との関わり方、挨拶や接遇
- 学級担任や他の校務分掌と平行して地域連携教員としての活動を行うことは大変でもあるが、地域の方と知り合い、コミュニケーションを図り、校区のことを理解することができる点はとても意義のあることだと思う。
- 本校に来てまだ 1 年目であり、まだ十分に地域の状況や実態がつかめていないため、まずは地域連携教員である自分の顔と名前を覚えてもらえるよ地域の方との交流を深めている状況である。
- なかなか、時間がとれずに、効果的な地域の資料や人材を活用できなかった。
- 授業やその他の校務に関わる時間、部活動との兼ね合いで十分に時間確保ができていません。
- 今年度社会教育主事講習を受講させていただいてからの地域連携教員ということで、もっと地域を知っていききたいと思います。

■ 中学校 教諭(担任外)・その他(講師等)

- 地域連携教員となったため、その研修に参加する機会が増え、見識が深まった。
- 学校内は私、学校外は校長と自然に担当がわかれ、動くことができました。この後、地域とつながることの良さを生徒・保護者にどんどん発信していくことが大切だと思っています。また、他の教員にも伝えることもそれ以上に大事なことだと思います。
- 地域連携教員は、学校の教育活動に地域住民の協力を得たり、生徒が地域に社会貢献活動を行う際のコーディネートをすることがおもな業務と考えていましたが、北海道教育大の廣瀬隆人先生によれば、個人的に問題を抱える生徒とその家庭に関わっていくことの方がむしろ重要な柱であるということのようです。中学校では、この業務を生徒指導主事がおもに担っていると思うのですが、地域連携教員の立場としては何をしたらいいのでしょうか。
- 今まで教頭が行ってきた業務もあり、自分が何をどこまでやればいいのか分らず、うまく動けなかった
- 地域連携推進教師には、学校が地域社会を育て、地域社会が学校(児童生徒)を育て、相互に好循環が生まれるよう貢献していくことが求められていると考えている。焦らずに一歩一歩進めていきたいと考えている。
- 先にも書きましたが、中学校では部活動等があるため、なかなか新たな地域連携の機会を増やすのは難しいです。いま行っている計画を深めていったり、発展させていったりすることを目指していきたいです。
- 本校では、以前から各学年・教科・行事等で地域人材を活用した取り組みが多かったので、新しくはじめるというより、計画をまとめる活動を中心に行っている。
- 既存の連携事業を実施する事が中心で、新たな活動を企画する余裕がない。どうしても他の主たる業務(学年主任)が仕事の中心となり、地域連携の仕事が十分に行えていない。
- 地域連携教員となって 2 年目ですが、学校内で重要なポストにいることを実感しています。だからこそ、はたらくしやすい環境づくり、地域へ動きやすい立場にするなどの校内人事の配慮が必要だと思っています。
- 公民館で行われている「学習支援活動」にもっと協力していきたいと思っている。社教主事の資格を取りたい。
- 「地域連携」というと、「学校支援ボランティア」のように校内に招き入れることがメインとなっているが、生徒が校外へ出て行くための地域連携についても考えて行く必要があると思う。
- 西方中学校区は、地域連携教育の蓄積が非常に多く、生徒の地域への活動も活発で、地域もよく理解している。
- 同じ中学校の学区でも、地域により中心になって活動している方々の考え方に違いがあることが分かった。しかし、中心になっている方々が、自分の地域に対する使命感を持っていることは、共通していると思う。
- 対外的な連絡・調整が多く、立場的に教頭が地域連携教員を兼ねることが適切かと思われる。
- 地域連携教員の必要性は今年 1 年間で感じました。ただ、地域にとって学校=副校長であり校長です。赴任 1 年目で地域に溶け込むことは大変に難しいと感じました。現在教員の異動は 7 年ですが、地域を理解するのに 3 年はかかるような気がします。つまり、短く保護者や地域と気持ちが通う頃異動になり満足した職務にならない気がして残念です。学校内での組織できちんとした位置づけがあると良いと感じました。

- 今年度初めて担当し、自分自身これまで携わった経験のない分野だったので、積極的に活動することができなかった。今後は、多くの先生方に協力していただきながら、チーム体制で運営していくことが大切だと思っている。
- 学校と地域との連携の重要さを実感した 2 年間でした。教育委員会主催の研修等大変勉強になりました。ありがとうございました。
- まだまだ校内での認知度が低いと実感する。数年がかりで変えていくつもりで、ビジョンをもって取り組んでいかなければならない。
- もっと地域と連携をとり、学校の職員にも理解してもらえるような体勢をつくっていきたいと思う。
- 正直なところ、多忙ではあります。しかし、学校では学べないことや、社会で身に付けなければならない常識や礼儀などを、地域の大人の目で見いただいています。地域で生徒を育てて頂けていることがよくわかります。たいへんありがたく思います。
- 暫定的な年間計画を作成したものの、地域連携教員としての業務を十分行っているとは言い難い。他の職員に働きかけて新たな活動を 1 つでもつくりたいと考えている。
- 地域連携教員の役職を担当しているが、地域の総会や行事に参加して、人脈をつくるのが大切と考える。
- 新たに何かを始めるといってではなく、ここまで積み重ねてきたノウハウが十分に各担当において蓄積されており、いかに地域連携教員がそれらの動きを統括して把握できるか。また、新たな連携については担当窓口となり、つないでいくという役割が大切だと感じた。
- 地域の行事に関する取組は積極的にできているが、校内の諸計画や細かい組織作りができていないため校内での活動があまり進んでいない状況にあるので、これから取り組んでいきたいと思っています。
- 連携する内容や授業時数によるが、勤務時間内外問わず多忙感を感じる時がある。勤務時間外での行事などでは勤務をどのように対応したらいいのか悩むことがある。地域の方に学校や生徒の努力しているところを褒めていただいたり地域で生徒達が活躍して貢献したりすることが大変嬉しい。学校に関心をもってもらい学校を支える人達を増やしたい。
- 地域の会議や文化祭に参加したときの勤務対応が不透明である。県としての基準を決めていただきたい。

■高等学校

- 頑張ります。
- 定時制高校への偏見などが、連携事業を行う支障となっており、粘り強い宣伝活動が必要と感じている。
- 地域と連携する行事を行う場合、企画立案・連絡調整・文書処理・予算処理等ほとんどの仕事が、地域連携教員に一極集中し、仕事量がかなり増えてしまった。
- 管理職に業務内容を尋ねても、よくわからないという答えが返ってくる。自分も含めて職員全体が地域連携について全く知識がない。この状態でどんな仕事をやれと言うのか。勝手にポストだけ作っておいて、大した説明もないままに係になんかやれというのは無責任だ。だいたい地域が成熟していないのに学校主導で連携ができるわけがない。そちらの方まで学校で教育しなければならないのか。このままの体制でこの制度を続けるくらいなら即刻廃止して校内で完結する方法を模索した方がいい。
- 地域連携の重要性や必要性は理解しているが、夜間定時制という学校の事情や教員の人数から、学校行事を通して地域との連携をはかる事柄が多く、地域連携教員としての活動は思うように進まないのが実態である。
- 地域とのつながりも（小中学校に比べて）薄く、学校の持つ課題が進路・学習に片寄っている本校では、地域連携の必要性をほとんど感じない。ただし PTA 活動などは比較的活発に行われているので、これらは継続したほうがよいと感じる。
- 県の施設の専門研究員などの協力を得るために、その施設の講座に参加するなど、相互の協力体制の構築に注意した活動をしている。
- 地域連携教員の仕事は教頭や主幹教諭が担ったほうがよい。
- 地域連携の意義は理解できるが、高校の実態により対応は難しい点があることを理解いただきたい。
- 地域連携教員の制度ができるまで、外部との関わりのある活動について問題のなかったものに関しては、地域連携教員が、あえて今までのやり方を変えて、活動を主導する必要はないと思う。新しく外部から、もしくは学校から地域との関わりを必要とするものがある時、地域連携教員がその手助けをするというのが大切なのだと考えている。
- 各高等学校の社会教育主事有資格者の活用を、検討すべき学校が多いのではないか。
- 那須町の地域の方々は学校に対して協力的で学校として地域関連行事が計画しやすい。また、教職員も積極的に地

域と関わろうとする意識が高いので、地域連携教員の負担が少ない。

- 自校にとって地域連携活動はどのような意味があるのか、そのために必要な活動はどんなことか、活動を通じて生徒にどのような力を身に付けさせ、そのために事前・事後指導を含めてどのような計画を立てるべきか、そうしたことを総合的に考え、自校の活動をより効果的なものとするための推進役となるのが、地域連携教員だと考えている。
- 地域の窓口は福祉については市社会福祉協議会、農業関係は JA、県農政事務所等、多くあり、学校自身が調整、企画しお世話になっている。
- 取り組みたい内容はたくさんあるが、さまざまな要因からまだ十分に組み立てていない。地域連携教員以外の先生方にも理解を深めてもらい、組織として動けるようになると思う。
- 本校は、既存の活動が多くあり、これまで関係していた団体の担当者は直接本校の実働担当者へ連絡を取っている。他の業務が多忙なことから、これらを全て一本化することが現状困難であり、地域連携教員の増員を促してもらいたいと感じます。さらに、社会教育主事有資格者を増やす必要性も感じます。よろしくお願いします。
- 地域コーディネーターに関する情報をもっと欲しい。(いるのかわかるか自体が分からない)
- 学校が取組んでいることの多くが、実は地域と関わっているということ、改めて認識できました。
- 学校の教育活動が進学指導中心であるため、地域連携の必要性が理解されにくい。地域連携活動で、良い方向性に变化した生徒の姿を見ることで、職員の意識も変わらなうと思う。焦らずに活動したい。
- 自分自身が地域連携教員を良く分かっていません。今年度研修に参加しましたが、多くの先生方(特に県立学校)はそれにおっしゃっていたのが印象に残っています。まずは地域連携の意義を学校の枠を超えて研修したい(例として県立学校の職員が地域連携の盛んである小中学校に訪問し学習する)です。そのような機会を意図的に設けないことにはいつまでも「ボランティア係」で終わってしまいそうな気がします。
- 今までどおりの校務と地域連携教員及びコーディネーターとしての両立は、厳しいのが現状だと感じている。負担が軽減できれば、もっと地域との連携を図る活動を取り入れた教育活動ができるのではないかと考える。
- 本校は研修を実施しなくても、地域とのつながりの重要性を理解している学校であり、工業管理部や各科で地域との連携が取れた業務を行っている。今後も学校内で連携を図り、さまざまな活動を行っていききたい。
- 様々な活動を「地域連携」の一環として捉えるようになりました。
- 商業科や家庭クラブ等の各団体それぞれに活動しており、調整が必要とされる場面もほとんどなかった。また、検定試験や行事等で忙しく、新しい活動をはじめたり研修を入れたいするには、余裕がないのが実態である。
- 地域の力を借りて教育活動を実践することで、互いの負担を減らしながら、生徒の体験活動と地域への貢献ができた。生徒達が地域社会と関わることを通して学び人間的に成長して、地域の人々に喜ばれ愛される人になるような活動を模索していきたい。地域への愛着や、栃木県へのUターンのきっかけになるのではないかと考える。
- 本校は既に地域連携事業が伝統的に行われており、教科、部、係、顧問等を中心に充分に行われ、さらに発展させるための工夫もされている。学校として、情報を共有し、理解し合うことが重要であり、地域連携教員の役目もここにありと考える。
- 研修で出張することが多くなり、授業ができず困ることが増えてきた。本校は実技科目でも週 1 単位で実施している科目もあり、授業に差し支えない形でお願いしたい。併せて、地区の研修会も含めて回数把握や検討もお願いしたい。
- 現在、担任や教科主任も担当している。特に、担任業務や教科との優先順位を考えると、やはり目の前の生徒を優先してしまい、地域連携教員としての業務が後回しになりがちである。高等学校の地域連携教員のあり方を考えると、各校それぞれ異なると思うが、改めてどのようなあり方を目指すべきなのか悩む。
- 地域との関係を持つことは生徒にとって有意義な活動である。すべての活動をおこなうことは、限界があるので情報を収集・整理していくことが大切である。
- 私が社教主事講習に行ったのは 4 半世紀前で、すっかり世の中が様変わりしていて社教主事として時代の流れに反応するのに苦労しています。有資格者ということで地域連携教員に指名されましたが、若い先生が地域連携教員として活動し、その上で社教主事講習にチャレンジしてもたつたら、より効果的であると思えます。
- 本校は比較的ボランティア活動に意欲的な生徒が多い。しかし、活動に参加する生徒は特定の者に偏りがちである。生徒の意識を高め、より多くの生徒が参加できる工夫が必要。また、連携の在り方について、校内でも研修を行うなど全校的な取り組みができるような仕組み作りが必要であると考えます。
- 「地域に開かれた学校作り」を目指して学校一丸となって取り組んでいるが、教員の中にまだ温度差がある。
- 本校のような「町に 1 つの高校」は地域の期待が大きき、年間のべ 50 以上の行事に取り組んでいます。コーディネーターである社会福祉協議会を通さないボランティア活動等は、相手方の要求が年々高くなりがちで、調整の難

しさを感じています。

- まだまだ地域連携の業務が大きな校務としての位置づけになっていないので、他の業務に時間が追われ、構想通りの地域連携に関する企画、支援、連絡に十分な時間を充てることができません。しかし、徐々に賛同する教員が増えてきて、学校教育が膨らみつつあります。
- 本校も含めて高等学校は各々の校務分掌、部活などで個別に連携を深めてきた実績があります。それらを有効に活用し、広く生徒及び地域の方々に周知していただき、更なる連携に取り組むことが大切だと思います。
- 教頭や主幹教諭が地域連携教員の場合と一般の教員が地域連携教員の場合で取り組む活動が大きく異なると思う。一般の教員が地域連携教員の場合には、教頭又は主幹教諭がコーディネーターとなり、協力しながら活動していけると、複数の業務にあたるようになると思う。
- 社会の変容とともに学校、教員に求められるものが多岐にわたるようになってきているが、問 7 に記した通り教育の目的を達するために様々な手段を選ぶはずであるにもかかわらず、「地域連携をすること」が目的になってしまう。本来の趣旨はそうではないのかもしれないが、多くの教員、管理職はそのように受け止めがちである。必要がないことまで強要されることのないよう、特段の配慮をお願いしたい。本来教員が尽力すべきことに時間と労力を割ける環境作りを切望する。
- 学校現場が取り組むべき教育活動は、法教育・主権者教育などなど、年を追うごとに増していく。「それらに加えて地域連携がのしかかってくる」という捉え方ではなく、それら新旧の教育活動の実施効果を高めるための地域資源導入の手法を編み出せるかが、この活動を拡充する鍵であると考えている。
- 外部からくる、あらゆる文書がなんでも「地域のだから」ということで回ってくるが、おかしいと思う。また、地域連携教員の位置づけが教員間においても、学校間においても異なっている印象を受けるが、まずはそのような根本的な問題を解決する必要があると思う。それと同時に、研修で学んだような地域連携教員としての仕事をきちんとやろうとすると、時間的に他にかけられる時間が割かれることになり、これで教科指導にかけられる時間が削られると思うと教員としての本末転倒であるように感じる。

■特別支援学校

- 地域との連携の必要性・重要性を理解・浸透していく難しさを感じる。地域連携推進計画等の説明を聞き、理解した教員は私からの提案を受け止めてくれたり、逆に提案をしてくれたりした。また、地域連携教員と実際の授業担当者との役割分担等も一緒に検討することができた。しかし、多くの教員はボランティア等の受け入れを考えてはいないのが現状である。ボランティア等を受け入れ地域との連携を深めていくためには、実践例を増やし教員の視野を広めていくことが第一だと考える。そのために今後、外部から講師を招いて講話をしてもらうなど、改めて教職員への啓発を行う必要もあると感じる。
- 毎日が勉強です。
- 連携のための連携のようなことにならないよう、今までの活動を中心に見直すことを心がけている。地域連携教員となってからの地域の見方と今までの見方は異なっており、また新たな勉強と考えて取り組んでいる。
- 地域の方と話をする機会が増え、顔なじみになれた。授業でいろいろお願いしたいと思うことが増えた。
- 特別支援学校はこれまでもセンター的機能等で地域への働きかけをしたり、現場実習で地域にお世話になったりしている。どこまでがセンター的機能も職業教育もすべて地域連携の一つであるとは思うのだが、地域連携教員としてどこまで関わるのか悩むことも多い。
- 地域連携教員の業務内容については、生涯学習課が発行しているガイドブックに例が記載されているが、実際は学校や地域の特性に応じて地域連携教員が考え、試行錯誤しながら進めているのが現状である。県立学校の場合、小・中学校とは異なり地域が広く、地域との密接な連携がうまく進められないのが現状である。県立学校の地域連携はどのように進めていくべきなのか、もう少し詳しい方向性を県教委から示してほしい。連絡協議会などの会議を年に2回は行い、情報交換する機会がほしい。
- コーディネーターは学校ごとに置くのではなく、地域ごとに置く方が幅広くボランティアの協力が得られるように思える。コーディネーターと地域連携教員の情報交換会が必要に思える。
- 地域の連携協議会等、学校代表として出席するのは管理職であることが多いが、その場に同席させて頂き、様々な立場の方と話を出来たことは大変有意義であったし、今後につながる話をすることも出来た。今後も積極的に地域の集まりに参加していくようにしたい。
- 0からのスタートではなく、ボランティア等既に行っていることがあり、係がいる中で、別の立場での役割をもったり新たに開拓したりする部分があり、難しさを感じている。

平成 27 年度

「地域連携教員の実態に関する調査研究」報告書

発行 平成 28 年 3 月

栃木県総合教育センター（生涯学習部）

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町 1070 番地

TEL:028-665-7206 FAX:028-665-7219

URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

北海道教育大学釧路校 廣瀬隆人 研究室

〒085-8580 北海道釧路市城山 1 丁目 15 番 55 号

TEL:0154-44-3369 FAX: 0154-44-3369